



新

新題
堀出
草誌

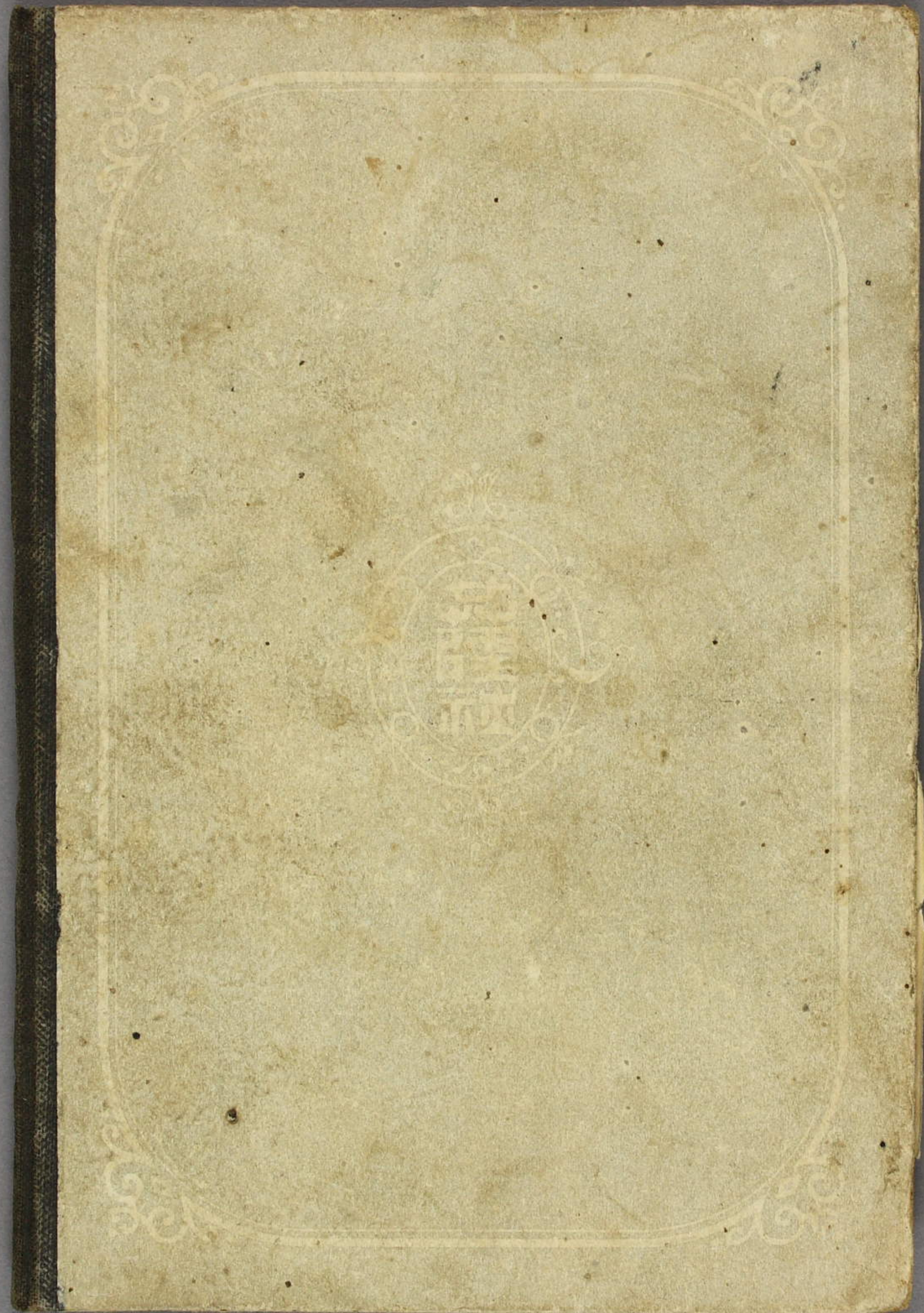
東京
海軍社



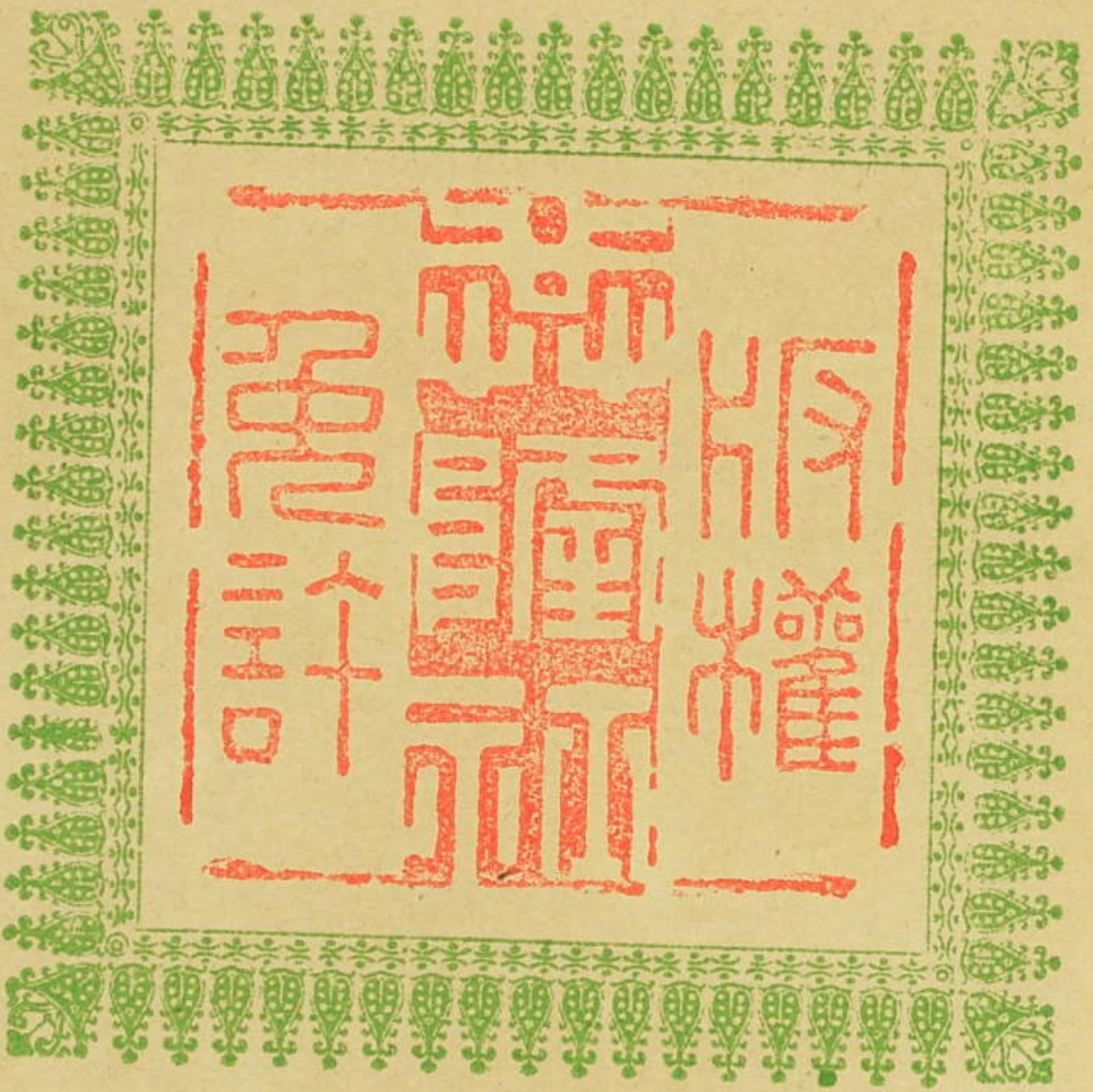
新











新題 堀出 雅樂多草誌序

臺所有雅樂多。曰鍋釜膳碗茶碗皿鉢德利コツ
プ火吹竹お玉杓子等。即是也。座敷有雅樂多。曰
火鉢煙草盆行燈。ラソプ碁盤將棋盤等。即是也。
蓋雅樂多者。不論其直打之高價。與安直。不問其
器具之上品。與下等。大小輕重。方圓長短。好者惡
者。直者曲者。破損者。滿足者。合併混淆之總稱也。
故有似不用。而不可捨者。有似不便。而不可缺者。
食飯無茶碗不都合也。吸汁無碗工合惡。盛菜皿

不可欠。飲酒盃不可無。茶碗膳碗箸揃而可食飯耳。德利盃皿鉢備而可飲酒耳。若夫至盛飯于小皿以并鉢吸汁。則其不鈞合不都合果如何乎。是所以雅樂多道具之不可欠不可無也。學問的風流上之事亦然。詩文章和歌。雖堅苦勞敷不可不學。狂文狂詩歌。雖馬鹿氣萬更不可度外視。俳諧川柳不可缺。都々一葉唄不可棄。何則堅苦勞敷。詩文章和歌有入用之時。馬鹿氣狂文狂詩歌亦有助興事。俳諧川柳都々一葉唄皆因其用場合。

而用之。則其功能可著。今若相手藝者。吟誦八家文。唐詩選。無固合三味線道理。又於偏屈學者。前迂鳴都々一葉唄。可被叱氣違。然不爲其見當違。所其用上手。則狂詩文狂歌。奏意外之功。都々一葉唄亦有存外之妙。非決可爲小馬鹿者也。我友人自笑居士者。常好學問的風流事。自詩文章和歌。狂詩文狂歌。以至川柳俳諧。都々一葉唄。咄癡利頓二上三下。悉爲其真似。其手際者雖格別非。上手。大抵胡麻化而濁於茶矣。故墨陀東台觀櫻。



新編

花_ナ詠_シ之_ナ詩文章和歌兩國九段觀_レ烟火_ナ綴_リ之_ナ狂詩
文狂歌瀧野川之紅葉袖浦之月景觀_レ之_ナ爲_ス俳諧
川柳都々一葉唄_ナ其他看_レ犬之合歡_ナ並_ニ咄癡利頓_ナ
聞_レ猫之喧嘩_ナ作_リ二上_リ三下_リ而使之見_ル夫々好_ム其道_ナ
者_ニ以_テ饒_シ舌_リ天狗_ナ爲_ス無上之快樂_ナ所_ニ其作_ル所_ニ其綴_ル所_ニ
其詠_ス所_ニ其並_ヘ悉_ク書_キ込_ミ之_ナ于一册子_ニ自題_シ云_フ雅樂多
草誌_ト是_レ蓋_シ風流之雅樂多_ニ猶_ホ有_ル臺_ナ所坐敷雅樂多
道具之大小輕重方圓長短其他種々察多之品
物_ト也其謄寫因_テ落成_ス需_ム其序文_ナ于主人_ニ主人感_シ其

根氣宜_{キト}與_ニ出放題有_ル澤山_ナ聊_カ爲_メ塞_ク其責_ナ記_シ雅樂多
之功能及_ヒ所謂因緣次第柄_ナ以_テ爲_ス序_ト是亦不免_ル雅
樂多之一部分_ナ也于時明治廿年第五月下澣

愛々堂主人誌

目録

○陰芝居誤文句の筋書

○笑學狂化書

讀本の部

輕財の部

醜身の部

算術の部

作文の部 二章

癡誌略 厄介國の部

○一口問答

○いろは尻とり都々一

○文字まらべ故事つけ理屈

○出放題一口講釋

○新体の詩 二首 上戸隊 下戸隊

○やまと狂詩 四首

○臺所軍記

○出放題目阿房多羅經

○質固偽術怪笑評

○小學生徒あぞへ唄

○道具づくし厄拂ひ

○即席ひとり占ひ

○狂句の功能書

- よし原狂句
- 新發明まやうぎの指し方
- 一日旅行記
- 當世流行投書の口真似
- 妓樓開業式のゐぞへ唄
- 地震の見舞
- 芳原楚女記の序
- 唐詩選摘句芳原全盛見立
- 半風子を夷ぐる説
- 道樂書生の故郷に歸るを送る序

- 蚊と蚤とと戒む
- 新撰變語集
- 道樂のお休み
- 娼妓の頼みよ應じて作るゐぞへ唄
- 旦那と權的との悶着
給金の殘額請求の訴及び半穴書
- 癡遊歌 一首
- 盆倉子初めて吉原に遊ぶを送るの序
- 凡太樓主人よ與ふる書
- 書生道樂怪傍聽錄

○風雅男より縁の君に贈りし玉章の寫し

○吝嗇坊先生の傳

○盆梅狂話

○某氏の子に名くる説

○氣樂堂の記

○吉原の不景氣を詠ぎ 長歌

○誤間可詩の序

○娼妓の年齢を限る可き説

○某細君に代りて外宅の妾に與ふる書

新題 堀出 雅樂多草誌

愛々堂主人 閱 笑々居士 輯 錄

○陰芝居誤文句の筋書

梅もも春の色をへて思へば輕し傘のゆき月落烏啼て霜天に滿たゞ有明の
 月ぞ残れるト清元の加藤ぶしみて幕明く正面愛宕山の石だん團子の如く
 積かさね石山の秋の月皎々として銀座の瓦斯燈に映じ三圍不動の五重の
 塔と攝津の天の橋立松島の景氣とと左り見越後の大佛堂と筑後川の軍
 艦とを右に見晴し横はま龜井戸の拵へよろしく有て此處へ岩見重太郎實
 は武藏坊辨慶いで來り洋服のかくしより巻物一反どり出し足で蹴飛して
 詞「まんまと寶藏へアバレ込み主君の賜りし千鳥の香爐これさへ有やア敵
 の手ぐり年取てもこの平作由良之助の心底見ぬいて呉んと立あぶら

んどすれバ男之助詞「家」仇する大鼠この槍先をうけて見よト門口も出
んとするを女房おどは慌々敷これを押しイユ〜今日の相撲の大達
よ振てやるお前の心ト云ふをも待て光秀の聲志とやかまお駒もむかひ詞
「ナニ猪口才なよまい言墮首と本物の香で知れるサウコウするうち時刻が
のびる其よろひ櫃これへ〜ト直義公のこしらへドッ宜しく有つて

か「焼野のき々す夜の鶴回向せうとてお姿を繪まの書せのせぬものを
浮と鷗の一イニウ三イ四。義理が浮世か浮世が義理が其の顔かくす
無理を酒

ト唄ひをはるを切かけ久松手習子供のこしらへて出来り詞コレ乳母
モウ飯は出来たかや政岡「チ、此處へお庭さきの枝折門この戸をた〜其
時の鐘の音を發するときくと墨すり流して「戀しくバ櫻はかゝる世の中
大宮人の露ぬれツ、ト一篇の歌を認むれば師直これを見て詞これの是
れ唐詩選もある曾呂利新左衛門の都々一これを知て居るからハマガウ方

あき柴田勝家敵の様子いごうじや〜ト責付られ不念の仕打よろし
く有てお輕の三曲とある此の處へ大岡越前守清正いろ男の拵へて出来
り半七もおたづね人どあり今ハ山崎村よかくれなき大津繪の名人と呼
れ尾張の國足利尊氏も仕官し月給八圓も雇へれ花川戸もて親分と立られ
居るよしを申し聞すれば鷲塚金藤治怒れる仕打よろしく有て詞「高い山か
ら谷底みれば組しく敵はたしか勝頼起さうと臥さうと皆この小平太が
胸中次第や顔世の色よきへんじのなんど〜ト膝すり寄すれば傍よ
居合す奥女中口々又詞「イユ〜何とお尋ねなされても彼の彌次郎兵衛さ
んど縁きる事嫌でござんす夫もマア大膽お我子を殺して高名顔エ、腹
がたつ此位牌のヨモヤ忘れ仕らぬか亡君の身代り拙者めが強てお
諫め申しおびんと寐ころべ幡隨院の長兵衛セ、ラ笑ひ詞「のんだ酒をら
酔ざアさるめへ酔た酒あら此方もこつち天川屋義平ハ男でござんす最せん
浮臺のあん物語り打て替つてその有様ハテ免やうな落つく先ハ九州さ

ら本街道の廻りみちお助け下さる滂慈悲心べまだくと和藤内のせりふ
宜敷あつて

かげ「ふだらくや岸打なみの三熊野の勤めと云ふ字も二ツない留守の
猶さら女氣のどうぞ滂慈悲も了簡勘平さんの三十に百里あまり
の道をつぎツイうかくと日をあくり廿日餘りも四十兩いくさの
門出にくれくも盡せぬ名をり清元と今の儘に正夢かへらく
へッたらハラくくそツと出しやドンガラガン思ひ掛あい今日
の首尾

ト童子丸の咏歌よて伊右衛門目をさまし喜びの顔色よて詞「だれかと思へ
バ名主さん此あばら家へ宜こそその出入來そこの貴殿の取なし又二ツよ
の君への忠義立派な武士となつ上穿索の仕方もなきよあらせ鈴木主水
といふ侍の女房をつれて西國巡禮ア、浮世ぢやなアと取ても附ぬ挨拶よ
武田信長緋の丸の扇をあびてチーイく親父どのと聲をかければ望月大

膳ふり返り詞「年端もゆかぬ幼兒よ毒と見たら喰と云ふ額のほくろよ覺が
ある蝶よ花よと育たも皆あこの老母がおもひ過しト打よろこべバ番頭小
僧口々よ「今日のお家の煤はきゆゑ手代「たすきを掛て小僧「帯はたきを兩
手よ持て女「掃たり拭たり女房「それじやよ依て旦那「ナンダと皆々「文句が埃
とさきだアチヨンくくくと幕

○笑學狂化書 讀本の部

○凡そ痴窮上の人種の色々にして態張人種うぬげれ人種天狗人種ノラク
ラ人種やきもち人種けちん坊人種おベツか人種虚言つき人種法螺ふき人
種薄情人種泥坊人種等ありて一様あらせと雖も坊人種を以て第一等の
悪種とすこの人種よ生るゝ時ハ大切の命を玉なしよする事請合あり
○人よ金ある者と金なき者もあるハ平生よ精出して働くとブラく怠け
るとよ因てあり然れば金の欲きもの働くべく金の欲くなき者の怠ける
べし

○汝の女郎を買ひ又藝者をあけて遊ぶ事を好むか然り吾の甚だ之を好めり然れども錢のあきとき之を爲す如何とあれバ錢あき時又遊ぶも愉快の心持せざればあり

○汝の登樓して馬を附られたる事ありや曰く之あり然れども大抵の途中よて胡麻かず故に我家へつれ歸りし事をしこれ親父の目玉を頂戴するを恐れてあり

○茲に氣の利たる別嬪あり汝の此別嬪を何ありと思ふや是の或どころの藝者ありしが鼻下長は可愛がられて今に權妻とありたるあり何よよつて之を知れるや頭の丸鬚と垢抜の志たる處と見ても知るべし

○汝の酒を好むか又餅と好むか吾の酒も飲まど餅も好めり然れども自腹を切てこれと飲これと喰これと爲さむ若し他人のオゴリならば決して嫌どの云はざるあり

○汝の金と借たるとありや又貸たるとありや否借たるとありや否借たるとありや未だ少しも返さぬ故に何れの家へ行も大抵の鼻つまみあり

○同 輕財の部

○飯時よ人來らば早速に膳を片づけて素知らぬ顔をして居ると宜しとす
○貧乏人の來るときに鼻の先よてあしらひ早く歸れと云はぬばかりの仕打よて之と遠ざけ金満家の來るときに成べく手拔あきやうに機嫌を取るべし

○傘提燈あぶを借して呉れと頼む人あるも誠よお氣の毒さまでスダあぶと其場合を考へ旨く斷るべし

○月夜よの行燈もランプも用ぬやたゞ雨戸と開けバ用向足るべし但し風とひく者の此限よあらぬ

○他所の家よ到りたるとき宜しく尻を落附て晝飯あり晩飯あり口稼ぎをせざる中へ歸る事あかれ

○烟草の人の口より吐たる煙にて用と足し酒の酒屋の前にて香を嗅べし

○暑中の勿論たどへ寒中よても裸躰にて暮すべし尤も人の着物か又の損

料屋より借出し賃錢と胡麻かして着るの妨げあし

○女郎買ひ藝者あそび等の人の奢りあれば二ツ返事でお供をすべし頭割

勘定あれは先づ逃る方が上分別あり

○おなじく 醜身の部

○父母兄弟の意見の云ふよ及ばせ親族朋友の忠告よ至るまで凡そ我身よ

とりて不勝手都合悪しと思ふことい決して構へ附きたゞ平氣の平左たる

べし

○女郎買ひ藝者あそびみて日を送り我身代を棒よふり又手の行届くだけ

の成べく借金すべし

○毎日朝から晩まで酒をのみ喧嘩口論むやみ矢鱈威張り廻るべし尤も

時々人の頭を張倒すもよし

○耻外聞あせよの頓着せせ面の皮を千枚ばりよして万事ツウくしく構

へこむべし

○親より譲り受たる財産の無茶苦茶遣ひ果すべし決して大切守る可

からせ而して世間の信用を失ふと以て極上等とするあり

○言葉づかひに成たけ洋語と漢語と片言交りよて何處の何兵衛が見ても

生意氣者と認め鼻を撮まるゝを宜とす

○勉強して金を溜る者を笑ひ人の物も自分の物も差別なく使用すべし

○わが持前の家業の打遣り放しよして毎日何事もあさぞ唯ノラクラ

として月日を送るべし

○義理や人情の知らぬ顔の半兵衛さんよて借金の催促をされ様々女房子

供が鍋へ死ふが聊かも心配すべからぬ

○金を借に行て金と貸さるときの大聲を發して罵詈謗し遠慮會釋なく

暴れ放題あばれるべし

○同 算術の部

○火の車あり其圍り苦尺よしして運轉はあはだ困ると云ふ今これより産借を
増すときその連轉の遲速如何

○酒屋へ三里豆腐屋へ三里ありこれより鬼も十八と白髪三千丈と虚言八百
と杜鵑の八千八聲と相撲の四十八手と千手観音と五百羅漢と二枚の舌と
を加ふれば其數幾何あるや

○先祖燈いづく梨はぢ柿不景氣かね檉やり栗の數種ありその長さ各々意
痴情碌尺あり今これを以て質借の貧棒を造らんとする時の如何よしして可
あるや

○八杯豆腐と一杯機嫌とを加へ口も八丁手も八丁を乗じ千里の駒と土手
八丁とを以て除すれば幾何あるや

○半風子ありその數と知らせたる着物の縫目を見ればその卵罌粟粒の如
く澤山あり若しこれを打遣おけば身体の生血を吸取ること幾許あるや

○忠兵衛ある者あり初め若干金と所持す然るも奈良の旅籠や三輪の茶屋
に遣ひ果して金二歩と残り興市兵衛の編の財布の五十兩と定九郎と奪は
れ平作の三十兩の石塔料と返し又行て身と果しおどはれ我身と百兩と賣
て稻川と助けしと云ふ然るときは總計金幾許あるや
○一夜飲過又頭痛八巻と加れば二日酔とある今これより酒一谷と雜炊三
杯とと乗せれば幾何なるや

○同 作文の部

金と借に遣り貸さるゝ付毒づく文

腹立まざれ臥して申し上らば叱らば自分色男備の危敷も語笑痴の通り天下
無双とびきり大極上々笑評つきの美男子として東西南北いたるところ別
續み袖をひかれ袖も袂も何れへ歎モヤとられ據るをくチャンくの袖あ
しを着て居る次第ゆるおのづから○も入川よつき此間より度々手紙を差
出し最はや小賣壹錢の巻紙十五六本と一對八厘の小筆十本ばかり費し事

嚴重よは掛合申し得ども今もつて文久一文どころか目腐り銭半かけも
 汚かし下されぬ如何ある誤了簡か通人の大頭領よりサツパリ相悟れ
 ざる儀もて不人情とも戯珍坊とも人非人とも人面獸心とも馬鹿治郎とも
 出額助とも廿五坐の瓢床とも頓痴機とも撥びん奴子とも何とも蚊ども
 し様のあい危殿もてこんあ戯怠者ある故よ上のは苦勞も絶ざる儀も
 んじ元來金と云ふ奴は天下第一般の融通物あれば有もの無ものよ之を
 與へない者はある人よ依てこれを借り倒すれ今更中すまでもなく百も二
 百も拙者丈の笑痴いさし居れ況てや汚同様又三千七百万人の兄弟あれば
 外の事いさておき金錢だけの融通ハ親類交際ハ仕度ものよ座ハ尤もあ
 る時ばらひの催促あしとい古來より貸借上の危則あれば此邊も誤勘考あ
 りて然るべし通人の口より斯まで細密ハ註釋を加へ申し述るも誤笑諾あ
 きよ於てハ拙者も通人色あどこの面皮もも關係し折かく面しろく遊ぶ積
 りの登樓も粹を通す待合あをびも殖んぞ狐脚と云ふ場合もも立いたり餘

儀あく酒も飲や都々一も議はゆ三味線も聞かや手踊も見や實ハ盈槍して
 猿の木から落たる如く河童の陸ハ揚られたる如く相成ハ付危殿ハ身代
 限りをして腕を叩いて歩行とも今まで旨い物を喰て生長たるこの色男ハ
 矢張どこまでも色男あり通人あり依然として先祖を辱めざる様七日七晩
 位ハ胸ハ手を當て篤と多思案これあり度ハ併し是程まで長文句を並べる
 も到底一文も貸事あらぬと云ふ解らややあれば最早千べん万べん繰返し
 云ふも無益とあきらめ見當り次第燈心で縛りあげ線香で痛くさい様に張
 倒そより外ハこれあくひまだハ此位あことでハ中し足おハへども馬の
 耳ハ念佛蛙の面ハ水ゆえ此邊もて一先づお事戯ハいたし目出度可縮

○同

欠落して歸りたる女ハ送る文

づうくしく構へこみ鹿角菜の行列とか釘の折とを合併して一寸申し
 あげぬ扱とや此度テコ鶴さんより承はりハへハ前様おん事せんじ
 つ欠落をさされハ處男の意思痴あきと金のおくありしよより早速尻よ

帆をかけて浮歸りあされし由さぞく 爾白くおん暮しあされし旨い物も澤
 山あたべあされボテく 浮ふどりあされし事と眞底から浦山しく存じ
 中さきより 世間のお娘達の親を恐れ人目を憚り耻どか外聞とか天保時
 代の頑固と申しゆへども元來人間の何時死ぬう分らぬ危き露命ゆゑ難で
 も難でも生て居る中よ旨い物も喰ひ觀たい物も觀きよたい事もきよ言た
 い事もいひ仕たい事も仕やり度こども遣り無茶苦茶よあばれ廻り金のあ
 る男の早速だまくらうして金を巻上らねが無くありや一昨日の出とサラ
 ンパンよするが當世だと云ふも間違ひあり去りて情死とて義理とゆう中
 すのの皆むろしの洒落よ浮座ゆゑ其邊の浮如才もあき事とは存じゆへ
 どもお前さまの少々お抜作の方ゆゑ念のためは心添まうし上るきし猶こ
 の度の出稼よて臍線のお餘りも座ゆへは少々よてもお配分をねがひ
 度ゆあらくしよ

○おなじく 癡誌略 厄介國の部

厄介國はノラクラ洲の中よ在り東はコマル山脈を以て界し西はアキレケ
 ール山よ接し南は釜灣よ枕む東西南の三方のみよして北方よし故に一名
 を北無國と稱す奇妙奇手列の獨立國あり國中よ我儘轉付阿曾美道樂喰度
 飲度自由勝手文無の苦郡あり
 無鉄峯の國の中央に蜿蜒綿亘する大山にして其頂上に一臺一樓あり行成
 放臺座魔見樓と名く眺望極めて殺風景にして唯運の月を觀に宜しこれに
 亞ものを夢我夢中當無胸仕用小松太燒糞等の諸山とす此等の山に生茂す
 る樹木の厚釜推龜松迂奴の大木飲梧耻枌武者栗寐轉檜一文梨杓子定木不
 景木頓痴木胡麻橙等にして其中よ不景氣胡麻橙耻枌を以て尤も多しとす
 此等の木を用ゐて貧棒吝齋棒ベラ棒ノツペラ棒等を製造す
 國中水路縦横して數條ありと雖どもみあ記するよ足むた々儘ノ川を以て
 大ありとす此川の源を無鉄峯より發し外聞耻不知等の地を経て當無小松
 太の連峯より發する嘘ノ川化ノ川面の川等と合し一大川とある急流激湍

にして架するに橋梁を以てすべうらむ土人この水を名けて向ふ水また世
 間水と云ふ其音シャアとして頓着の處なく釜灣に至り海に入るこの
 川の兩岸に繁茂する者ハ妻蘭。質草。笑ひ草。氣尾紅葉。消佳蘭。等あり
 阿房港ハ釜灣の傍にあり凡庫港と相並び共ハ國中の要樞として生魔船。尻
 魔船。花世耶船。釜今船。等檣を連て林立すまた別ハ尻輕船。浮氣船。と名くる者
 あり尻に帆を掛て走る舶上の便利船あれども常ハ金の鎖を以て繋ぐ歟ま
 さい蛭子様を先導ハ使はされバ兎角ハ放流し易しと云ふ
 破加觸ハ此國の大都怪にして人口嘘八百方おのゝ相應の營業を爲せど
 も一として満足の者あしその荒増を茲ハ列舉すれば無茶を賣る者あり馬
 鹿下駄を鬻ぐ者あり盆槍を製するものあり嘘衡を作る者あり飛田琴を賣
 捌く者あり馬の耳に念佛を唱ふる者あり蛙の面ハ氷をうける者あり糠ハ
 釘を打込む者あり豆腐ハ銚をたき込む者あり而して唯何程搜しても無
 きものは馬鹿ハ附る藥のみ

損名事社。堂下門社。苦損社。遊徳社。ハ皆貧乏神を祭る大社にして小松田山の
 素徹邊ハあり人この神を信仰する時ハ造作なく身代を打潰すと云ふまた
 王奴寺。道樂寺。奥の院。ハ阿曾美郡ハあり照々坊主。來々坊主。一ツ目小僧。鼻垂
 小僧。等これハ住するなり
 この國ハ蕪田。荒野多し。唯。難田。艱田。胴田。荒田。と名くる田地あるのみ此田ハ
 ハ話の種を蒔その苦し實と採り命を繋ぐなり
 物産ハ梅毒蠟。肝癢餅。掛鳥。夫見鷹。晝鳶。宿梨。食酢。飲酢。衣の實。着の飯。逢鯛。見鯛。
 主ノ蕎麥。泡を疑冬。証文紙。等あり

○一口問答

△ハ問答

○二階を廻ざるに二階廻しといハ如何△手を引茶を賣ざるに引手茶屋と
 云ふが如し○女郎屋といハ頭禿たる者をも若い者と云ふハ如何△ばハア
 ても新造と云ふが如し○坊主ハ非ざる小供を小僧といハ如何△手の代りを
 爲ざる者を手代と云ふが如し○一枚の紙と半紙といハ如何△一羽の鳥と

二ハトリと云ふが如し○川越又生じたる者と薩摩芋とい何如△地上に産
 したる者と空豆と云ふが如し○西洋物と唐物とい何如△日本の製造品な
 れどもカラカサと云ふが如し○炭を取らざる又炭取とい何如△針と入れ
 ざるも針箱と云ふが如し○細き事として大工とい何如△大ある事とし
 ても細工人と云ふが如し○飯を喰ふ器と茶碗とい何如△薬と煮ざるも薬
 罐と云ふが如し○水と引ざるに水引とい何如△紙と入れざるも紙入と云
 ふが如し○早き物あるもユウビンとい何如△飛ざるも飛脚と云ふが如し
 ○色黒しといへども素人とい何如△色白しといへども黒人と云ふが如し
 ○さほと藝なきも藝者とい何如△太鼓と持ざるも帮間と云ふが如し○四
 日よても弦月を三日月とい何如△朝降ても驟雨と夕立と云ふが如し○卷
 て寐ざる者と寐巻とい何如△鉢と巻ざるも鉢巻と云ふが如し○水入れ
 ざるもヒヤカシとい何如△日よ乾さざるもホシ店と云ふが如し○古くな
 りても新聞とい何如△新しきもフルヒ(篩)と云ふが如し

○いろは尻とり都々一

如何あるお醫者も解剖の出来ぬ色と慾との有とこ
 論より証據だ是マア涉らん羽織と着物よ浸染とまは
 葉唄文句の口説じやないが歸りやまやんすう此雪よ
 二世とちざりし寫真とながめ思ひ出しての片まくば
 古反よまやんすな私しの苦勞みんなたれ故お前ゆへ
 返事するさへ猶はづしくモシとよぶのの猶のこと
 床の番する振られた客はみんな出雲のうみのばち
 千歳までもと契りしものと今更されるタそれの無理
 怪氣で私しに云ふのじやないが主の浮氣のあせ止め
 主と二人でいま此苦らう寐ものがとりのときもある
 るの字の頭へこの字とがの字附てくだくヨこの胸と
 とそい歸りを待つとぞれて思はせひきさく水うちわ

わけも云はせにさ、口小言あいを附しうまれるのり
 かせく恨は積つて居れど主のはあしのおとに志よ
 よせと云われりや又猶さらには折て見たいヨ花のゑだ
 たまさり逢たよ短い夏の夜あけてかあしき朝わかれ
 れこが無ゆへ見切たれど振れたる客はさぞやさぞ
 をしらぬ素振ハひと前ゆへと承知しあがら腹がたつ
 つあざ所のあい身のつらさはんよ私しりすて小ぶね
 ねても覺ても苦勞の夜あかまくや戸たたく彼の水鶏
 あよから先云てよいやら二人えはし莞爾まら目くら
 らくを務めじやあいと知れど主の爲あら厭やせむ
 むりや邪見も苦勞だけれど可愛がられりや又苦らう
 うしろ姿はたしかまそれと思へどまさかま呼まくぬ
 ぬまも今とて貴君のうはさあど取あすくはせもの

飲あらむ待ヨ爛してあげる夜更ちやあよしヨ冷酒あ
 おしき筆とめまづあらくと用事ばかりまひし
 くもる月影つぢうらわらく思ひむすばるむねのあや
 やさしい氣立まツイうかゞと迷ふ心のくるひごま
 まさうそれとも言出しかねて一寸つあざの茶碗さけ
 びいしや娼妓の家業とぬしはまこと三分ようそ七分
 ふるい文句の氣証をかくもたがひよ浮氣をせぬ証據
 こぬしこがれてやうく逢ハ儘よあらかい人のまえ
 えらひくくと無暗よほめて人をおだてるぬしのゑて
 手管と知つとツイ欺されて何そりや宜らう是ハまあ
 ぬの時あアして是かうしたも今じや互まわらひぐさ
 さへえ様でもまゝそぐ雲るところばそさの秋のつき
 きれいな姿も待みまやあらぬ溢れ易いよはあのかゆ

ゆめハ逆夢當入ハあらぬといへ氣もある今のゆめ
めと出しや剪取花咲やはさむほん不實な花ばさみ
身入の覺への無いでいさいが餘計な世話だよ新聞紙
まッかりかよめ比翼の紋も未だ合どの三ッども
えんと撃ぎの屏風のあかひきるまきれない蝶つがひ
ひとりくよ〜案じてまてけ永く思ふよあつた夜も
もしやそれろと戸を開け見れば悪い辻占あきのうせ
せけバせく程アレ憎らしい人とぢらそよほととぎす
そいた同志で夫婦よあつて意氣あどころよ暮したい

○文字まらべ故事つけ理屈

○明 万物の中よて第一あきららうある者の日と月あり故よこれを並べて
アキラカと讀むあり

○拾 十と同じよて兩手を合せバその指十本とある故よ手を合ををシウ
と讀むあり

○話 舌よて言葉を遣ふ故よ舌と言をあらべてハナシと讀むあり

○泉 水の湧出るときハ其色極めて白し故よ白水をイツミと讀むあり

○萍 浮草ハ水の上よあるときハ平ある故よ草水平をウキクサと讀むあり

○孫 子より系をひくもの故よ子系をマゴとよむあり

○招 召ハメスあり言葉を用ぬ手と以て呼ゆえ手召をマチクとよむ
あり

○愁 秋ハ何となく心のさびしきもの故よ秋の心と書てウレウと讀むあり

○娘 鬼も十八山茶も煮ばち杯と云ッて女の若きときハ一寸良ものゆえ
良女をムスメと讀むあり

○姑 どんち老れバシウトメ又ハオバさんとある故よ古き女とシウトメ
と讀むあり

○問 門口ハ山あるときハ万事不自由ある故よ門の中へ山を入れてサシ

○忘 ッカヘルと讀むあり
亡ハウシナウあり心と失ベバ何事も覺へぬ故に亡ふ心とワスレル
とよむあり

○枯 木古くあれバ皆カレテ仕舞ものゆゑ古木をカレルと讀むあり
○晴 天氣の宜い日の空ダ青きゆゑ青い日とハレルと讀むあり
○沸 水と火と掛れば湯となり已に水の縁と離れる故に水と弗と書テ

○沸 ヲクとよむ人又弗と書テ佛と讀むも同じ事あり
○妹 兄弟等ありテ其末に生れる末の女とイモウトと讀むあり
○備 庸は常あり人に使はれる者は皆庸の人あり故又庸の人とヤトウト

○備 よむあり一説又庸ハ用るあり人を用ゐる故又ヤトウトと讀むとも云
へり

○尖 物のとがりたる形の皆うへの方小さくして本大いあるゆゑ大の頭
に小と附テトガルと讀むあり

○腫 この字の篇ハ肉を略したる者にて身体のはれる時ハ肉重るゆゑに
肉重るをハレルとよむあり

○拱 右の手と左の手と一所又する故手を共又すると書テコマヌクと讀
むあり

○出放題一口講釋

頃ハ天保八十の通用脚の三月炎暑赫々寒風凜々の眞際中アシヤ洲ハ英吉
利のくに巴里斯の都府と距る五里霧中の片ぬあり南海道ハ沼津の里筑後
川の水上又富士の山と狭さみヒユードロくドマバヌくと戦争をおツ
初めたりこの時先陣の大將新田筑後守正成の出立を見てあれバ金の鯨鋒
を腦天又いさゞぎ儘ヨ三斗笠と脊中又せおひ舶來の長靴と兩足にはぎし
め勘平の猪打鉄砲と小脇よりひこみ乍ら大音あげて迂鳴けるハヤアく
遠うらんものハ耳にも聞け近き物の鼻も嗅げ我こそハ正一位稻荷大明
神第一世ナポレオンの忘れがとみ平の與市兵衛楠判官頼朝の親類武藏坊

辨慶鎌足の家來播州さら屋敷お菊の化物どの即ち我事あり問ぢうく寄
て勝負を決せよト襟髪とつて引寄せれば歳十六様わが子の年ばへ南無
妙陀佛法蓮華經とサアベル抜て刺さんとす此とき遅し彼のとき早し父母
のめぐみも深きころわ寺と詠歌を唄うて來りくる相撲とり是あん梅川忠
兵衛の親父よて和藤内忠勝あれバ流石の大岡由良之助もハツトばりりよ
驚ろきて静浄前楊貴妃お初もろ共に親の敵きおもひ知れ目指ハ羽柴一人
と竹槍の天秤棒をふりまわし丁々はッ矢ちやう八矢上段下段虚々實々十
八番の無敵流よて戦ひしうぞ稼ぐよ追付びん棒おけれバ覺へぞ知らせタ
チくと後邊よ引て駈出し一目散よ逃出しとり是より幡隨院の子分をさ
のみ再び川中島吉良の屋敷よ亂入し唐琴屋丹次郎阿波十郎兵衛討死をそ
る一席ハ明晩の前席に申し述べませう

○新体の詩二首

上戸隊の詩

酒ハ憂ひの玉箒とび切無類の名薬ぞのめバ飲ほぞ心地よく借金とりも
何のその。上野のさくら隅田づとみ。花見ゆさんよ夕涼み。藝者あそびや女
郎らハ。婚禮祝儀なり直り。めでとぎ席よ酒あくバ。手もち無沙汰のうざり
なし。飲や飲く。圖歩六よ。女房を質よ置ととも。朝のむ酒ハ格別ぞ。酔ばら
うべし倒るべし

下戸隊の詩

酒ハ身体よ大毒ぞ。酒ハ氣ちぢひ水ぞろし。無口の人も饒舌だ。貴人の前
も憚ららぞ。喧嘩口論たよき合ひ。隣り近所を騒がして。お巡査さんの厄
介。家庫までも飲つぶし。親兄弟に見放され。五尺の身体こまるより。蒸菓子
ようかん金米糖。嗜つておれバ大丈夫。喰やく。諸ともよ。花より團子喰ふ
べし

○やまと狂詩 四首

題 芳原痴苦詞

急ぎゆく跡あし又綱びき。人車ぐらく。恰も飛ぶごとし。個はこれ茶屋横

附の客。べら澤山の旦那なり(イの韻)
看板はくちやう兩手ももち。別嬪先も立て路あんき。目的の稻本か大文

字か。兎もかく上等の愉快すぢ(イの韻)
目玉パチクリ名代ご。來か。と待受るところ。大引すでも過て猶いま

だ來ら。甚助先生不平のかほ(オの韻)
財布底を叩いて己も餘りあきも。平氣の平左もこ。小聲の恍惚よ

○臺所軍記

爰もアメリカ洲天竺の國川中嶋村ある厄介長者のめしつかひ釜元三助入
道と云へる者日頃あつかふ所の臺所諸道具如何ある事と立腹せしか俄も
軍勢をそろへて坐しき道具を打潰さんと企てける左れば討手の大將龍將
軍火元士塗公の下知よまかせ失權職鍋野黒太夫蔓無。釜輪鑄掛之助尻炭。お

のく組下の者どもを竊かよ呼子の笛を福徳幸ひも味増こし手桶米あげ
箆われもくと馳きたる頃引窓の障子元年わかりを酉の歳軸の十二月
三十五日の早天ねこの眼の變ると合圖として板の間々原も軍勢をあつめ
座敷道具の猪口納戸たち籠りたる備後表の疊々原の城廓として發向す眞
先よハ襪襪の二色も黒く釜敷の痕つきたる大雑巾の旗を縁下風もへんボ
ンと吹あびかせ先陣の大將鍋野黒太夫蔓無。炙子あさしの大よろひ勝手胃
の緒を堅むくま。りお玉杓子の差物あし鍋敷の駒も打跨りも蔓かけたる
鐵弓を引えぼりやオレ腐り掛の雜菜小肴ともも煮直して呉んづとグワ
グワグワ。乗出す引續て赤鍋野綱の末葉煮鳥鍋五郎蓋塗ほで張の團扇
の前立物も五徳と名づくる三本足の駒も打乗さい着ふり立て下知をあす
中陣の大將釜輪鑄掛之助尻炭の出立ハ蒸籠こしきの陣羽織折敷布の母衣
武者もて焚付毛の野痴馬もアブク立てツ煮へ立たり引續て出立たるの近
年外國より潜り込たる火事の本元コストヒール眞四角ある一箱と名

けし文久二女の馬も蹄り大音あげて吐鳴けるのヤア〜
 と以て之を見よ動く物の早どり寫眞を以てこれを取れ我こそい昔し西洋
 文明國の出産至極調法あるマツチヌて擦れバ眞火を出す故よコスルト
 ヒーデルと申すあり迂奴等マゴ〜すると立どころも焼拂はんツとバ
 チリ〜火口を切て馳出す後陣の大將近江煎茶釜の茶苦流茶々木茶加綱
 の茶壺の胴丸茶頭の茶ブトを茶くし茶袋の男衣をかけ茶ビ月毛の無
 茶馬茶鞍おいて茶ツと打乗り茶釜の輪乗又乗はし無茶苦茶に飛出し
 たり遊軍の茶切庖丁之助切味水桶皮の鎧又并鉢を生首も着あし太刀の
 名もあふ眞黒き軍又堅魚の刺身庖丁はそ身あがらも差添て薄刃の長刀
 こわきよかいこみ組板の駒も眞名もしの鞍を當て平一面又乗出を遙か
 後れて物置の住人松木白藏脂吹儘よ三斗笠を眞横又被り白く春毛の駒も
 米鞍置てユラリと打乗りむかし取たる杵柄を横へ春米胴の大弓よ一升
 杵の鉤を掛磨をましたる白米の矢の根五六升を携へ〜是等の兵も大將

として随ふ所の武士も薬罐太夫煮湯教盛録倉五合徳利酒有。味増臭志守
 焼可。膳谷椀官壺平。箸者一膳守禿足。湯藤入道汁盛。三庄太夫榎木。瀬戸摺八。佐
 々良三太郎。田鷺洗之助を初めとして其外何のお茶とうもあらぬ缺茶碗
 へチマの土器。燈明皿。片口ぐらもさくやき合いづれも向ふ水瓶の早合點。あ
 とつて碎ける無敵流。敵の生首を桐びしやくト勇み勇んで我もとらじと
 獲向を扱勝手方の總大將の火の用心と書さる旗ざるしと眞先も押立て竈
 將軍火野元土塗公その日の出立に。椶皮の厚板。金物うち付さる大鎧に
 火消壺のかぶとと生首も着なし總銅壺のあかやね作りの太刀と横へ灰
 毛の駒もうち跨り随ふ所の勇士も。槓割鐵之助。焚炭。大マサカリを眞向よ
 かまへ〜り引續て雜木松王。堅木梅王。都合主従よき一丁。割込〜敵の奴原
 一薰しよエブシて吳んと焚付かけのけ相加はる勝手二階より加勢として
 敷紙の旗眞先も押たて天徳寺入道南無三坊を先として安家火鉢坊。眞黒多
 鈍九郎坊。四角枕板志坊。唐笠六郎古骨。その外二階のカラクマ勢さしもに嶮

しき初子坂も眞逆落し、買くだり後陣まこそ、加はりたり都合その勢ひ
 十ノウ茶筌柄杓小重餘器。一度、荷を繰いだし銅盃をさき立て、吶喊天井
 よ響き棚はり、轟き無やみ矢鱈無鐵砲、進入したりこのとき座敷方、
 柱時計鳴藏八角の眼玉をひらき之を見て時の聲を合せ磁石の劍さき東西
 南北、振まわし櫓の下、分銅無茶盛任いづれも不意を討れし事あれ、
 時を移さば叶はじと中も香車ある將棋駒王丸の金銀の鞍あきたる桂馬
 よ打乗り急ぎ王手をかこひ角道をおしひらき敵を今やと待駒の手あき時
 の端の歩をつき雪隠詰ふからぬ用意をあす此とき半銅火八郎は石火矢は
 うろくビシヤを打出す折から碁盤四足、双六番藏はせ來りて巨燵やぐら
 駈上り三百六十一の碁石つかんで礫、打ちかけはねかけ敵の奴原一々に
 四ツ目殺し、まして吳んどバラくくく打出せば引續て双六番藏、丁目
 斜目の嫌ひ、白黒の石をかひ握んで三ピンがっさらへ一六かどめ落し
 九二九ゾロと響け出す寄せ手の礫、當惑し進みかねてぞ見えにける斯て

座敷方の總都督眞鍮名言金物卿の長男、引出筆筒錠鍵成、ごみはさきの采配
 お取って下知をあそ折から乗出せ先陣の大將六枚屏風太夫紙張、雀形の陣
 羽織を着し狩野の畫きし馬、英かけて金沙子の鞍、おいて打まゝぐり墨繪
 の槍を横とへ左右、明障子唐紙建分、跡、續、其ころ天下一と呼はれ、
 る鏡野照光あるわすれ、み黃楊野櫛藏、あじく五郎時櫛はキハ墨と名
 づけたる駿馬、小枕おいて打跨り鬢さしの弓に元結の弦を張かんざしの
 尖り矢、つさへ乗り出す後陣の大將、手習駿河守、贅書ハ臭墨と名づけたる
 三寸の黒駒、草紙のあほりを懸て硯長雄、作の鞍、おいて打跨り流儀ハ王
 義之の筆の鎗先、つゞく丈ハ手あみを見せんと、蛭餅の如くノタクリ出す扱
 弟子組子の者共、大文字角兵衛、牟田垣反古藏、小遣帳太、曾露盤主計、二一
 天作、を初めとして九々八十一騎、當千の座敷勢、われ劣らじと繰出す其の外
 名を得し衣類勢、箆筒の中にありと雖、もさる貧乏年中質草川に戦争の砌
 り流れ矢、あどり又ハ日濟の催促にせめよせられ、屑者五左衛門古鐵の秤

ごとくに掛り南無三方ヶ原に打死せしを以て此合戦の間に合はぬと見へ
 たり斯て勝手方の先陣鍋野黒太夫の備後表の壘ヶ原まで備へて繰出せし
 が案内知らざる事おれに當惑いとし進み兼てぞ見えよける此とき行燈明
 の助後陣より進み出で我等の毎夜座敷方へ入込しゆる勝手おぼえ有けれ
 バイザは案内を致さんと有明の馬よ打乗り一番乗とぞ呼はつたり續て油
 差藏勘寺暗之助の一本燈心の者ども我劣らじと乗出しければ座敷
 方にての洋燈明燭臺眞貴郎會津蠟燭之助亂府保屋三郎糸眞蠟燭人力蠟足
 等一度にドット燃出しければ寄手ハシタリと掛向ひさしも廣き壘ヶ原
 又埃烟とふみ立蹴さて戦ふ中又勝手二階の不敵武者眞先に進み出で我
 ツの生れ付さる腕の力ハ千人力にして梅ヶ谷大達も徒跣で逃る黒羅沙の
 雨除丸と云ふものありと聲高らかよ呼はりければ之と聞より座敷方茶の
 湯座敷の住人蘆屋釜之助煮立カラと打わらひ茶杓に合羽が高官かあ
 相手にあつて得させんと茶柄杓おツとり打て掛れば合羽はパタリと身と

かはし尻をねらつて組んとすれば煮立の合羽に尻を見込まれてハ大變と
 後ろと見せて逃入たり之と見方の座敷より長者が孫の翫弄物の一人梶白
 天能の後陰テレンツク天狗の面ハ鼻高と名乗合羽と目掛けてムンツとくみ互
 ひに劣らぬ天狗と合羽志むし勝負も見えざりしが斯る處へ面ハが兄弟ぶ
 ん瓢床面藏はせ來り豆鐵砲又鼻藥を込め火蓋を切て放てバ誤またせ合羽
 の胸を打ぬかれカツパと倒れ臥たりけり之と見るより合羽が一族蝙蝠傘
 溝骨傘六郎古骨折太下駄野政兵衛足駄野高助舶來靴助等ゲタツクツク
 ツ苦笑ひしながら聲々に雨除丸の敵き瓢床面藏を打取と呼はれば天狗の
 面ハ瓢床面藏ハ高慢の鼻と高くオキアガレコブシと云ひあがら風車の如
 くガラと打はらひ竹馬にうち乗り面藏つゞけと城中さして引退ぞく
 再び乗出す糞年越中太紐有と名乗りねせみ色威の大鎧志み附毛の駒又股
 鞍おいてヒラリと打乗り有切と名付たる三尺餘りの太刀を真向にヒラメ
 カシ群る敵へ切て入る其勢ひすさまじく敢て近寄ものも無りけり此時勝

手二階より天徳寺入道クサレ帷子に身をかゝめ垢付毛の駒に貧腹客の鞍
 おいて紙帳の母衣とザツクどかけ寒中凌金高の鍛へたる借錢貫目の貧棒
 を火の車の如くからす金の繰廻しの如くむやみ矢鱈にぶん廻し糞年越中
 太と目掛けて打てかゝれば越中太も心得たりと身をかはし互に勝負を決せ
 んど貧々べらく戦ひしと天徳寺の鋭き貧棒に流石の越中太も及ばぬ力
 ありけん遂に入道破られ果敢なく爰又打死す是を見るより越中太が宿
 の妻湯文字の前は年二八の白齒の長刀小脇にかひ込み夫の敵きのどし
 難しと呼はれば天徳寺入道青筋たてゝ怒りゴツ／＼と打笑ひ小癩あり湯
 文字の前夫婦もろども此世の陰道渡して呉んど打て掛れば丁どうけ上段
 下段の秘術をつくして戦ひける敵も味方も入りみだれ軍の花をぞ散しッ
 ヅ陣鐘太鼓時の聲ドット吹來神風に異なる神体あらはれ給ひ我の此家の
 三棒荒神なりそも／＼三棒とは貧棒。ケチン棒。天秤棒。これを合せて三棒荒
 神とい中すなり我を信心せざる輩らの儉約をもつばらにも物の貴へを省

き旨い物をくはせ我家業に骨を折り衣物を着せ汗水たらして稼ぐべし今
 なんぢ等私しの同死軍の彼れこれ以て儉約の利にあらせト三棒荒神よ不
 似合ある少しく理あるその言葉よ諸道具を／＼恐れいり其儘和睦に及
 びし虚言八百年の事ありとぞ

○出放題目阿房多羅經

エ、――恐れあがら勿体あがら遠慮ざらいの阿房多羅坊主が口から出任
 せ無やみ矢鱈のお饒舌り文句をコソサ皆さん聞ても下さ(ポク／＼)
 昔し徳川政治の頃よ金の先箱下たよ居ろと威張威張って撥鬢
 奴子巾を利せて馬鹿も利功も二束三もん自分さへ宜ければ他人にや構
 はぬ町人百姓うじむし同様理屈にまければ無禮者だと理も非も云はせに
 切捨汚免の勝手成ばい強い者勝にて弱いもの閉口無理が通りて道理が引
 こむヤレ／＼困った(ポク／＼)それに引かへ明治の太平四民同權
 旦那も三も理屈づくめで強弱平均をにど何でも蟹が嘴でも智恵がなけ

れが旨い汁ア吸へあい(ボク)底で各自に智恵の出しくら學問
 仕をけりや道理が知れぬと傍訓新聞かん語を覚えて物知先生ふゑたの宜
 けれど追々ひらける日の出の勢ひ天保時代の頑固親父じや若者にや叶は
 ぬ(ボク)六十の手習素敵よ奮發いろは字引を暗誦するやら蟹
 の横文字知らなきやダメだと獨警古の假名つき讀やら内地雜居が何の事
 やら國會ひらけて堂ある物やらお先まっくら騒ぎ立ても効能が見へあい
 オットどつこい勉強が肝心(ボク)あれも西洋これも西洋々々
 西洋々々でなければ夜も日も明ぬと西洋最負の半熟先生エースとノウと
 の片言交りて我田に水ひく妙な曲尺手前勝手の杓子定規もむかしと違つ
 て人が利功から胡麻かし議論はあか(ボク)通らぬ(ボク)日本の
 着物に起居に不便だ日本の食物ア衛生にあらぬ日本の家屋の法に適は
 ぬ着物に洋服くひ物ア牛肉家屋の煉瓦とあらかと相場極つた様だドラ
 ヲヤの洋服ア安くない出來ない西洋料理の直段が高いぞ煉瓦の家屋も口ハ

ての出來ない堂すりや宜のか坊主もや解らぬ(ボク)日本の品
 物アなまが悪いか改良々々と手をかへ品かへ切たり接たりコチクリ廻し
 て到底損すりや草臥まうけた夫の兎もあれ覺悟か知らぬと智恵の問屋の
 新聞の直下げのどうしたものだイ讀者の徳だか夫ではあんまり活智がな
 いぞ下是も商法から競争もよけれど種々味なきや何にもならぬ(ボク
 ボク)ちか頃アあんでも早い賞翫自分で工夫を附るや野暮だと
 人のかんだへ横取はじめて何かを手輕を儲けの無かど他人の贖鼻揮で相
 撲を取るのが當世流行うまい事かんだへりや直に真似だヨ折角うまい事
 かんだへ出さうぞ旨い工夫と附て威張ろが手ぬるい事での真似の火の手
 が強くあるから本家と出店の差別が附かい處で專賣特許と出かける商標
 の登録ねがひ濟から此奴ばかりは真似が仕度も真似が出來ない(ボク)
 ボク)田舎親父が金があいとて愚痴をこぼすも無理じやあければ元來
 この節アあどり長じて昔しの姿の丸で形をし彦作太郎兵衛肥桶かつい

で絹ばり蝙蝠傘、鍬をかついで表附の駒下駄、シヤツ、ア被って縮緬の兵子帯
内へ這入れ、バ、万古の急須で煎茶のたのしみ金が無かりや米を賣やら麥を
賣やら粟喰って金策五兩一分じや利息が嵩んで返濟出來あい(ボク、ボ
ク)一生けん命むすめと育て尻を目當え左り團扇で格子住ぬと出掛や
うと思つた嗅アのもくろみ當事と越中の向ふより外れる近頃ア權妻の相
場も下るしお負、島田じや開化に不向だ去りどて流行の束髪あさまじや
化様、困つた鍋しき頭で飾りも無ければ面、むき出し、獅鼻、鰐口ヂヤ賣れ
口、あいで目算が違つた(ボク、ボク)餘り長いと客が退屈まづ
此邊でお仕舞、ダ、此跡、お好み次第、ダ、何でもは布施次第、ダ、おやかま
醜(ボク、ボク、ボク、ボク、ボク)

○贗固偽術怪笑評

○あをら屋に火の雨の降る圖あよび汗水を流しあがら火の車を回轉とこ
ろの置、小松多樓主人の筆、よして、餓鬼の吼、面山の神の、ア、ア、ア、舞のあり

さま眞、よ追つて甚だ妙あり

○尻、輕女の尻に帆をかけて逃る圖は、薄情亭の筆、よして其行がけの駄賃、よ
人の品物まで我荷物の中へチヂ込む處、至極面白し

○火事場、よ野痴馬の飛出す圖、餘程飛間人の筆、よして其口を開て騒ぎ立
る様子、の妙、あれ、これも水を汲せられる處、あさ、い、少々遺憾あり

○出過者、の尻馬、よ乗る圖、餘計名信平の筆、よして其口を尖らし人の疝氣
を頭痛、よやむ調子、合、ん、感、心、々、々

○細君、の焼餅を焼く圖、四嘴面氏の筆、よしてその細君が額、よ青筋をだし
疊を叩いてグツ、グツ、小言を並べれ、宿六どの、飛、でも、あ、い、事、を、嗅、つけ、ら
れ、と、云、ふ、様子、よて、濫、い、閻魔面を、あ、し、咬、へ、烟管にて、少、しく、顔、を、背、ける、處
に、至、極、よ、ろ、し

○暗の夜、よ牛を引出す圖、あよび河童の尻の圖、よ、眞黒あると黄色ある
而已、よして其巧拙を辨、あ、べ、う、ら、や、筆、者、も、誰、や、ら、分、ら、や

○千里の馬の圖ハ伯樂氏の筆あれども其馬餘り長すぎる故もや首ヲリを
書きし少しく残念

○美人天上より落る圖ハ白紙にて其何なるを辨せ可うらそ是ハ美人
ガ今以て天上より落來らざる處ありと云ふ其美人あち來上あらでハ善
惡も評し難し

○大石内藏助ガ城を枕し討死せんとして頭の寸法をとる處の圖ハ忠義一
徹氏の筆にして大名城ハ小き禿頭を並とるハ意表し出て一層の妙味あり

○凡突冶郎ガ果報を寐てまつ圖ハ安戯樂閑人の筆にして人の働く處を岡
目見えて食ふものも食ひ日干の様又瘦ても猶氣の附ざる様子ハ馬鹿げと
事だと云ふの外なし

○甚助が廊下驚ふ化る圖ハ婦亂運太郎の筆にして其甚助ガ歸るくと騷
ざとつ處へ敵娼が出て來てナンダねへ前さん私ハの身も成ては覽あ
ねへと甚助とトンと一ツ叩くと流石の廊下とんびもグニャ〜とある摸

様一寸あもしろ味あつて且つ巧あり

○鼻され小僧ガ劍突を喰ふ圖ハ以來氣尾附樓主人の筆にして其小僧ガ煙
管あぐりをニツ三ツ打くらひ涙をこぼしあぐら逃る時に袂より薩摩芋ガ
ころび出す趣きハ餘ほぞ奇妙あり

○白鼠ガ大福帳と噛る圖ハ胡麻化氏の筆にして右ハ算盤とひくへ口ハ棒
切筆と咬へ少しく小首を傾げて堂しさら帳合ガ追附かと思案最中ハカク
シ名前の郵便ガ届いて莞爾嗤ふところハ中々上出來と覺へさり

○明めくらが小供ハ愚弄せらるる圖ハ後悔太郎の筆にして其明盲ガいろ
はと倒様見えて居る處へ學校歸りの小供二三人ガこれと見て伯父さん夫
は倒さだよと云ハれて明盲先生の一寸當惑したれど何くは顔して是ハ

前達見せて居る處だと負おしみて云ふ處の有様ハ至極面白し

○馬の耳ハ念佛の圖ハよび蛙の面ハ水とかけける圖ハ池洒亞々氏の筆
して友達の忠告も親族の異見も父母の小言も兄弟の親切も何も蚊も少し

も感ぜぬ飽までツウしく構へ込たる面持の流石も池酒亞々氏腕
前十分なり

○晝驚が懷中物を引さらふ處の圖の失策居士の筆もして一人の野師が大
道も店を開き是れこれ西洋のガラハメツキごなた此方の上手下手のない
ト出鱈目も機能を述べて眞鍮を磨いて居る處を田舎漢が感心して見られて
口をワングリ開て居る様子と晝驚がねめ附て懷中物から煙草入まで引ッ
さらッて行どころの眞も追ッて随分巧みあり

○權的が增長して細君を尻も敷どころの圖の穂頓度平高氏の筆もしてお
心よしの細君が黙然て辛抱して居ると權的のいゝ增長して己れが氏
あくして玉の興も乗たると手柄もあもひ天下でも取た氣もあり大威張も
威ばり廻ッて本妻を大尻も敷んとする摸様の傍も鼻の下の長い先生が鼻
毛を伸して眺めて居る處の肝癢持をして頭と張こくらしむる程の好趣向
もして且つ妙巧あり其上も贅あり其詩も曰く

表向於姫様

内心丸切殊

時々爲二買食

僅是百文半

○無鐵砲も法螺の圖の向水氏の筆もして是の豚尾坊主の出品あるが此無
鐵砲の爲も要償金を度々フンダクられたるに至極尤も千万と想像せしめ
又法螺の上も贅あり曰く美人天上落。白髮三千丈。張飛發大聲。百万軍敵退。鐘
鼓動天地。力柱鐵鉤索。酒池肉林奢。死骨五百金。あど吐方吐鐵もない口から
出まかせも吹てく吹きまくる處の随分口(デハナイ)筆力も顯はれて頗る
妙あり

○貧乏書生が小田原評議の圖の妻利駄目太の筆もして七八人の治郎が寄
合を爲し甲論じ乙駁し旨く成就しさうで終も立消となりまた初めてハ又
オシヤンとなる處の様子寫し得て見事なり
○宿下り女が命の洗濯をせんとする圖の思案最中の筆にして其をんなが
命と鉤合の給金五十錢札と巾着より出しこれを眺めながらハテナ是で本
郷の安芝居へ行て見様かイヤく血の出る様を金だから佐竹の原であそ

んで来た方が宜か夫よりか自宅に居て焼芋でも嚙ッて済ませた方が宜か
らうか杯と色々まよふて居る中、日が暮て仕舞ところの工合に至極妙を
れども命の洗濯をする、儘の川を少しく残念

○天狗の飛損ひと百足が轉ぶ圖、間違太郎の筆にして其天狗の鼻をしら
が折れる様子と百足が跛脚ありたる處、妙味あり

○枯木は花の咲たるを花見風が眺める圖、匍匐亭の筆にしてその半風子
先生が春暖に乗じてノソソ散歩する處、手もあく取捕まり爪の頭にて

ピチリと往生する調子合ひ實は痒きを搔の思ひあり

○宿六が二日酔の圖、頭痛先生の筆にして山の神がブツブツ小言を云ひ
あがら雑炊を煮て居ると其傍で鉢巻をまた治郎がゲロゲロを遣かし近所
の者の虎列刺病と間違へて鼻を撮んで逃る處をか細密にして可あり

上出来と見受たり
○舊幣親父が幣をうつぐ圖、習慣子の筆にして老筆おやぢが自分の身

体へ鶴龜福徳の文字および寶ぶね七福神あぞの目出度こと斗りを彫附は
げ頭は大神宮様のお札と十五六枚えはり附たる模様、實は抱腹絶倒と云

ふべし
○瓢箪うら駒が出る圖及び灰吹うら蛇がとび出す圖、何野琴太の筆とし

て其繪様のおもひ附、宜しけれども何分出口の小さき故にや駒も出せ蛇
も飛出させと瓢箪と灰吹とのみを並べし、誠は駒と事蛇とすすの外

あし
○手當り放題山水の圖、餓餓堂の筆にして其畫様を畧記すれば真向ふに

借金山ありて其山より文無の瀧落るその下流の橋、一人の餓客が手よべ
ラ棒をつき借金山を背ひて立てり其上に嘘月ありまゝ出放臺、情目多樓な

どありて随分殺風景の模様、人をしめて呆れ返らしむる程の上出来あり其
他井戸端會議の圖、提灯につり鐘の圖、焼木杭に火の附圖、地獄で佛に逢ふ圖

塵積ッて山とある圖、貧棒とノツペラ棒の圖、牡丹もちで頬ぺとを叩かれる

圖開口に牡丹餅の圖多福が甘酒に酔る圖あきッ面と蜂にさされる
圖はだうで道中する圖めくらの牆のぞきの圖鬼に金棒の圖鬼の目涙の
圖武藏坊辨慶と小野の小町が道行する圖岡目八目の圖青砥藤綱が色青く
して文久錢を穿索する圖脚の路切の圖七賢人が藪蚊ささられる圖權兵衛
が種蒔ア鴉がはぢくる圖儘にあらぬ浮世の圖どんで火に入る夏の虫の圖
等種々様々奇々妙々すこぶる奇手列妙不可思議の代物澤山あれども餘り
長いと又ソレ例の欠伸が出来ますから先づ此位でお仕舞に致しま笑阿々

○小學生徒のぞへ唄

- 一ツとせー 人よさきだち朝はやく起いでろちち母目上と挨拶し。
氣を附ヨ
- 二ツとせー ととり三人五ろくにん。ともとよび。わるさいとづらせ
ぬがよい。氣を附ヨ
- 三ツとせー 見たり聞たりもの覺え。忘れぬに。ころろと留るが肝心

ぞ。氣と附ヨ

- 四ツとせー よみ書そろばん骨と折り。精と出し。人よまけせよ劣ら
ぬ。氣と附ヨ
- 五ツとせー いつも試験及第し。とうぶらぞ。教師のをしへにそむ
くなよ。氣と附ヨ
- 六ツとせー 無理と云はぬ。正直。おとなしく。けん嘩口論せぬが
よい。氣と附ヨ
- 七ツとせー なまけて遊べ。馬鹿。あかり。何事も。親よそむけ。不孝
もの。氣と附ヨ
- 八ツとせー やさしき言葉。つけ上り。満心。人の悪事。とりさるを
よ。氣と附ヨ
- 九ツとせー こぢきするの。金持も。ころろとけ。みんなふだん。勉
強せよ。氣と附ヨ

十とせー 當時のむろしと事うはり。開化とて。万事ばんさん智慧
くらべ。氣と附ヨ

○道具づくし厄拂ひ

ア、ラ目出度あ〜。個様目出さき祝儀。道具づくしで祝ひませう。上
よ懸る鍋のつる。下よ座る水ぢめや。松の薪に火吹だけ。鑄うけてうめる
釜の穴。貧乏うまごも賑はひて。米櫃一ぱい米もあり。一升徳利酒もあり。腹
よ樽ほど飲食ひし。ねるも起るも自在うぎ。飾ひ借まで皆うへし。鬼の責苦も
皿よちく。茶碗とそまそ大三十日。戸さうぬ。湯代鉢いりて。ツラ鉄瓶の厚皮
も。手桶と突て庖丁し。椀白小僧の鼻とれも。膳と悪とと辨へて。杓子定木の無
理云はせ。片口あらぬ。理屈云ひ。どんぶり鉢のどんぶりに。ヤレいとわしの情
死も。火箸まつとと助けられ。裏だな喧嘩やうちはもめ。仲裁いらせ。穩ピンも。
ととみ附ろの悶着も。理非曲直と障子して。マラ棒威張のこともなく。親子鏡
臺むつまじく。あんう炬燵で大氣らく。娘よさせ。絹衣裳。桐の簞笥の嫁衣

る。藥罐あさまの舊弊も。そろばんづくで開化ぶり。商ばい繁昌銚子よく。ざり
ざり結着ふんばつし。帳合りまはぬ景物も。愛敬家業の大のみ込み。はり合ひ
づくの安くらべ。屏風の中の痴話ぐるひ。船底枕の新猫や。ふとま蹴倒と風さ
わぎ。意櫛をく出も罰金も。うがひ先よととぬゆる。拘印は免と後すさり。扱
まよ田舎の琴かはり。作物鋸らせ極上々。不印し景氣も吹蚊帳し。むしろの旗
の騒ぎなく。腹つゞみ打豊年。目出さき上の大目出さし。もし又不景氣が來
るあらば。蒸氣又積で外國へ。はさきで拂ひ箒ではき。むやみ矢鱈追ひとむ
し。臺所座敷と打越して。浦の物置とん思へども。道具尽しの事をれば。貧乏は
き溜のをか品國へ。サツサとはらひませう厄はらひ。

○即席ひとり占ひ

- 夜なかよ待合よ來る人あるときハ風あり
- 上手お碁打と手合せして旨く勝し時ハアメなり
- 角力の興行が滞うりなく濟むときハ晴天あり

- 餘り悪口をとくき悪戯をして敵媚は憎まるゝ時ハフルなり
- 俳諧宗匠の家はゆく時ハ追々曇て(句以て)くるあり
- 彼方おもへば照日もくもる
- 餅と細よきる時ハアレどなる
- 芝居と見るときハ頭へ斗り雪ふる
- 雨ふらざる時ハ必き早つゞくと知るべし
- 晝も箆笥の鑼が鳴るときハ地震あり
- 論語と讀むときハ朋遠方より來るあり
- 越中ふんぞしと失ひし時ハ向ふより外れしあり
- 障子の破れさるときハハルあり
- もの事の嫌ひよかりさる時ハアキなり
- 明めくらの人ハ水姓(見せ姓)あり
- 女房を離縁するときハサルの日あり

○ 他所より金の入り來るときハトリの日なり

○ 狂句の功能書

むかしの流行謠は曰くまるい玉子も切様で四角ものも言様で角がとつと
 感服つかまつる哉この謠や茲に心よし即ち薄野呂の人あり世人斯様
 を薄野呂を指して猫みと様な人と云ふ而して薄野呂先生これを聞も敢て
 失敬とも思ひや既失敬とも思ひざる故又腹も立や然るも若しこれを犬
 みと様な人だとか狸みと様な人だとか舐みと様な人だとか頼みと様な人
 だとか云ひや如何は薄野呂先生といへども必や額に青筋を出して立腹
 すべし即ちソコ物も言様で角が立つ道理はあらや又茲は頼邊ふくれ
 て鼻柱ピシヤンコの女あり此女は向て土多福だとか狎が噓しと様だとか
 云ひや其婦らならや脹れ面を眞赤として怒て云ひん土多福でもお前さ
 んの涉世話は爲りません狎噓でもお前さんの涉厄介は成りませんと
 然るも若しこれを福相だとか愛嬌があるとか云ひや其婦わらつてお冷笑

でないヨと機嫌よろしくらん夫れツコガ物も言様で丸くおさまる道理よ
 あらや抑く狂句の四角ばりを丸くし堅苦勞しきを柔りよし立ッ面を
 笑顔とちし闇魔王が借金取も出逢た有様と大黒天が別嬪も戀れられた様
 子も變ぜまむる道具よしして浮世を茶よし娑婆をお菓子く暮し世を諷し人
 を諷むる狂句の極意よしして彼の「一聲の月があいたる杜鵑」をつんばら
 唯あり明の月ばり」と一轉し即ち四角張を丸くし堅苦勞しきを柔りよ
 變じたる狂句の旨味あり宜ある哉狂句の流行するやト頼まれもせぬ狂
 句の提燈持を爲すこと書の如し

○よし原狂句

毛をふいて疵をもとめる検査醫者
 おしげなく遣ツとあどて惜くあり
 惘然なものだとオツまはまり込み
 あめあめてあんの雲あく振れて居

紅髯の妓いはく云ひがたし

じつらしく羽織うくして質よおき

法官をたいこ持だど妓夫誤解

ひやうして後よおひくあつくあり

ハテ不思議廁の娼妓いま出す

這入るとき堅い大門氣もつら

○新發明志やうぎの指し方

先づ初め飛車の道をわけ夫より角行の前の金銀を支度し土手八丁を香
 車の芋ざしと出掛け王門をねらッてツツ的中へくりこみ目指す平氣
 の平左衛門と飽までもツウしく身構へをして飛車くよて對面する
 とも決して王手うれしやと思ふ様子を見せ若し歩あしらひの時桂馬
 のふんどしを堅くノ香車ばりりさうへ行ぬと角道の横よひん曲り其手
 の喰ぬと度胸をそへ妓夫の音も出ぬ様よしして敵娼(チハナイ)敵將の様子を

覗ひたどひ雪隠へよびこんでも何でも兼て用意したる金銀を以て賣たつ
れバ屹度勝こと請合あり

○一日旅行記

居士ある日のこと少しく要用のあるありて横濱へ行んと思ひたち俄に冷
飯の茶漬を二三杯ひッりけて新橋のステーションに至りし生憎發車の
時間外れ二三十分過ぎと早きとの中間は遭遇し是れ困つたと思へども
眞逆別仕立の瀛車と注文する譯も參らぬ因て先づ中等客待の室の中
入りて口ハの新聞縦覽あざ仕あざら一狂詩と得たり

三十分程違定刻欠伸出任爲休息新聞縦覽体裁宜其實切符
便赤色。下等切符者赤色也。故結句及之。

右新聞縦覽の際外國新聞ありしゆ是ハ妙妙鉄釘の折が並んで居ると盲
目の垣のぞきをして居し處へ一人の客ありて居士に向ひ外國新聞の何
様かことと記載てあり升ると一本喰つて居士頭を掻きナニ別段おもしろ

い事もないのサと胡麻化子たる處と一詩綴れり

各種新聞墨汁畫中看西字目云々有人時間記何事答曰是何
外國文。

夫より發車時間來れば例の赤切符と買ひ列車に乗て一ツの失望あり即は
ち左の如し

非上非中其又隣乗車都合見廻頻別嬪入處附尻入。豈料旦公
同道人。

車輪一轉して品川の停車場に到るこの時舊遊と思ひ出して
新橋出後十分間早已品川第一灣思起昨年居續日的之膝枕

眺三房山

居士の傍よ二人の商賈ありて辨舌爽かよ何だかベチャクチャと濡手で粟
とつかむの計畫と談話するを聞き居士はこれを山師と鑑定したり
言語混交和與洋。法螺吹合口先強。不云失敗唯儲斗。知是山師

大商

斯して川崎大森も早すぎ鶴見村に停車のとき料らや横濱の舊友何某乗車
せり餘り不思議あるに依りまゝ一詩を賦す

振不振

友人鶴見の梨子を一籃とづさへ居し其の中二三個を居士と分與せり依て
居士色氣と離れて之と嚙るゝ其味ひ甘美かれバ鉛筆と出して一詩と記し
謝詞と代ふ蓋し鶴見村の梨手を出ずを以て名ある所あり

勿辨梨

程なく横濱に着しこの友人と別れて直に人車を馳て甲の家より到りし處主
人不在と聞き落膽せしかど餘韻を筆端に一詩を作つてお三どんと渡
し置たり其詩と曰く

急用有之態々窺御留守段大當差今回來訪非金借何卒晚程
願拜眉

是よりまゝ人車を飛して乙の家より到りし是もまゝ不在なれば二度の落
膽よて強腹まざれ亦一詩を遣かして玄關に張附おきたり

亦聞留守凡槍顔車代十錢屁一般折角參堂乍殘念太田反對
不逢還自註太田者地名國音通逢

乙の家を出て丙の家より到らんと思ひしが諺に二度ある事の三度あると云
へバ又い留守の恥搔きよ遇も計り難しと考へまづ縁義直しよ傍一人前三
錢五厘の牛店よ飛込みお手輕様よ一酌を催はしおがら又一詩を賦しより

喰來姿

腹蟲頻訴不平一時竊入牛店傾一卮乍去逢人無吐實西洋料理
微醉を帶て牛店を出づ武士の食ねど高楊枝よて近邊を遊歩しまゝ甲の家
より到り主人よ面會を得て談話數刻を移し終に夜よ入りけれバ主人の一泊

せよと頻りに留むるも依りまゝ出鱈目を並べて主人に示せり
財布平生無一錢威張暮日僕持前。縱然有海山馳走不若我家
伸足眠。

夫より該家を出てまゝ瀛車に乗て歸宅せし午後十一時すぎの十二時前
ありき

○當世流行投書の口真似

○金のナル木が欲い 金のある木と一本求め度そんじゆゆ若しこれ

ありゆい郵便先拂ひよて報道と乞ふ

○競争の結果を待つ 競争と云ふ事ハ餘程よい工夫ゆゑ競争も競争と

重ね早く品物を只貰ふ様も致したきものあり

○借金取の改革を望む 借金取が借主の顔を見ると放々の体で逃る様

よして貰いた

○馬鹿も附る薬も無いか 開明の今日もありたるも馬鹿も附る薬もなき

ハ遺憾なり藪醫先生も考へあれ

○質屋の大赦を望む 當今何へても意表も出るが専一あれハ質屋でも

物品の大赦を行あひて如何

○妓樓の景物 此節ハ景物を出す事が大流行ゆゑ女郎屋もても來客一

人ハ金拾圓位ツ、景物を出して如何とせず

○寒中はだかの方法 寒中ハ丸の丸裸体で居ても寒くない方法があら

バ教へて頂戴

○死人は口あしとハ嘘 死人ハ口あしと云ふハ虚言よて一ツの口ハ有

れども言語と吐く事ハ出來ぬあり

○金の説 金ハ調法の物よて遣へば遣ふほど減るものなり

○晴雨を論ぜ 晴天ハ雨ふらや雨天ハ雨わり傘なくして雨天ハ歩

行すれば着物ぬれて溝鼠の如し

○無筆學校の設置を望む この文明のとき無筆の多きハ誠ハ遺憾あり

故も早く速成學校を設置して全國の無筆を學者にして貰いたい
 ○預り金といたす 小子この度金の遣ひ方を發明せしに付澤山彦所持
 の人の遠慮なく持參われ無証文無期限にて何程までも預るべし
 ○合ひ惚の廢とべし 合惚と云ふ奴の兎角も人をして焼餅を焼しむる
 ものゆゑ何卒これに全廢しよき者あり
 ○鴉も忠告す 燈樓して大持のとき朝早くよりガアア啼れるの誠も
 迷惑ゆゑ鴉よ少しく斟酌を頼む
 ○痘痕の療治の出來ぬか 種痘法の出來しより痘痕の人あし然るにそ
 の以前アバタを生ぜし者を療治する法のなきか
 ○火と水の關係を論ぜ 火の熱く水の冷かあり故に火事のとぎの水を
 以て消すべし而して水を湯とする時の火と以て沸すに如き
 ○老人の言を聞いて感あり ある老人の曰く我已も百歳に近けれども未
 だ河童の尻を見たる事あしと宜ある哉予も亦見たる事なし

○酒の説 酒のその味旨し飲ば飲ほぞ酔ものあり
 ○花より團子 旨いかな此言や花を見たりとて空腹にて仕方をし團
 子を喰へば旨くして腹空しからず
 ○世間見せとの何ぞや 世人よく世間見を云々の語を吐く我これを理
 解し得たり世間見せとの盲目の事あり

○妓樓開業式の數へ唄

居士ある妓樓の開業式も招待せられし時同席の人々より居士も何か
 思苦詞を一ツ遣べしと責られたれども扱妓樓の思苦詞と云ふもの
 如何様の事を中して宜やらサツパリ見當ら附ぬゆゑ即席料理も一ツ
 とせ一節を唄ふて娯魔化子たり一寸その唄と左に録す
 ○一ツとせし 人を騙させよコケよせよ正ぢき正銘も營業せよ氣を

附ヨ

評曰先素徹邊加一鹹于樓主

○二ツとせー 文と出すの、宜けれども、嘘をあらべてだますあよ。氣を附ヨ。

評曰 文を出して客を騙すこれ客を文附るあり

○三ツとせー 店の若い衆の注意して。無理にお客をあげるあよ。氣を附ヨ。

評曰 エへ、へ、へ、へ、立番先生如何様

○四ツとせー 餘儀かい譯から是非あきも。成るべくお客は無心すあ。氣と附ヨ。

評曰 ヒヤ〜金聴〜

○五ツとせー 居續けさすのも人よる。務めある身を留るあよ。氣を附ヨ。

評曰 合惚亦應依此例。

○六ツとせー むだぬ金を遣ひして。自慢するの、間違ひぞ。氣を

附ヨ。

評曰 婆亂搔者流。宜留于心頭之金言。

○七ツとせー あじみのお客の猶更よ。薄情ナあつかひせぬら宜し。氣を附ヨ。

評曰 粹子の注意いされる哉

○八ツとせー やたら無性ふだて込み。餘計を臺酒とらせるあ。氣を附ヨ。

評曰 小格子の適藥

○九ツとせー 困る、我身の不仕あはせ。早く身ぬけのかくごせよ。氣を附ヨ。

評曰 所謂樓婆心切歎

○十とせー 當時の規則をよく守り。むかしの習慣を打すてよ。氣を附ヨ。

評曰此一言抱括前歌。即是十歌一束。

○地震の見舞

友人何某が地震より落されたるを聞き可哀想よおもひしまゝ之と書おくりて其心と慰む

蒸瀛船といへども確かありとて安心すべからず時として沈没の憂ひあり乞食といへども愚かありとて馬鹿なすべからず時としての馳走の喜びあり運と不運の天ありて牡丹餅の棚ある道理つきよ叢雲花よ風どかく浮世の中ブラリン恰も河童の尻の如し泣てくらすも一生おれば笑つて暮すもまゝ一生まわり燈籠のクルクル回る丸い卵も切様で四角うへ見りや丈おし下見りや切おし運が来れば馬骨も忽ち玉の輿も乗り運が無ければ嫌でも髻と剃おとす事もあり名馬も不幸な逢は馬車の馬も追ひ使われ薩摩芋も僥倖と得れば美人も嘗らるゝ事あり然らばイクラ盆槍として考へて居た處が天から金の降る氣遣ひもあければ難でも借金が出

來たら傘と横よして通りぬけ阿房から果報と寐てまち利功を人から一生懸命も稼ぐが肝心

○芳原楚女記の序

奇妙奇手列變法磊ヒヨツ床坊主ある何居勇藏あるもの一日散步かゝく予が破屋と訪ふ予やたま〜閑暇机も凭て金儲けの種と考ふ勇藏坊主安戲樂閑として予が面附とあがめ不審の晴ざる様子よて突然袖とひき問て曰くオイ不粹子コソサ賤生君ハ狂氣でも仕たか將た濁酒よでも酔たのか今日も限り俄よチビ筆凹み硯と擔ぎ出して何とする了簡ぞや予答て曰く否〜決して狂氣したるよ非や又飲ざる濁酒よ酔氣づかひあし予が今日こゝにチビ筆と揮まわし凹み硯と擔ぎ出す所以ハ他でもね〜此頃の不景氣よてマゴ〜すれば鼻の下乾あがるよ依り芳原楚女記チウ滑替洒落の至極面白くして且つ旨味のある世界無双大極上々吉すこぶる奇々妙々大笑ひ一九親父三馬親分も既足で駈出す如き一奇書と綴らんと計畫の眞最

中ありと勇的これを聞き大口を開きオラ／＼笑ひあがら額又八字皺をよ
 せて曰く君常談と云ふ勿れ夫れ出来易きも似て難き者の滑稽あり何故
 に六ヶ敷かと云ふに彼の滑稽洒落ある者いたゞ情洒落を以て誤魔化子も
 のよあらは洒落の中にも寓意諷諫チウ者ありて笑へせあがらもナール程
 と感心せしむるが即ち滑稽の極意あり然るも君が如きまだ嘴の青き一山
 百文の小僧よして面白くも可笑くもねへ多話を吐露も十人並の膽玉あ
 る人間に決して相手よせざるべし人だ相手よせざれば何程はねを折も皆
 無益骨折りあり無益骨折を知りツ、餘計な時間を費す之を馬鹿と云ふ君
 請ふ馬鹿を骨折り廢却して仕まへ廢却して仕まへと予曰く君屁理屈を並べる
 あかれ予の予が了簡を以て戲著のみ別段君も助筆を依頼わけよあらは笑
 ふ人はいくらでも笑へ誹る奴はいくらでも誹れ予に於て何の頓着あらん
 や君復た多話を吐くあかれ勇的呆れ返って曰く君も随ぶん洒ア附だあ
 アと迷痴重苦年狐月狐日總雪隠の傍らよ獅鼻を撮で識す

○唐詩摘句芳原全盛見立

主人不相識(娼妓の情夫) 囊中自有錢(大尽の愉快) 由來天下傳(庄
 司の創設) 壯士髮衝冠(振れた書生) 白首爲誰雄(樓母) 君思那得
 知(初會の客) 秋風不相待(娼妓の薄情) 形影自相憐(老妓) 低頭
 思(故卿) 出嫁娼妓) 深坐嘔(娥) 眉(大樓の妓) 不知心恨誰(金尽て後)
 相逢問(愁苦) 鼻下長) 相送臨(高臺) 朝別れ) 花間笑(語聲) 仲の町の
 櫻) 復照(青苔) 上(七月の燈籠) 彈琴復(長嘯) 流連) 春眠不(覺曉) 情
 夫と情婦) 大道直(如髮) 日本堤) 含情無(片言) 大樓初(會の妓) 春潮
 夜々深(馴染の後) 便爲(獨往) 客(若旦那の四會目) 故園今(若何) 娼妓
 の心配) 君家住(何處) 妓夫の帳附) 可(歎) 無(知己) 病院行) 寄向(故
 園) 流(娼妓の郵便) 更(登) 一(層樓) 大樓) 冷(艷) 全(欺) 雪(見番藝者) 寸心
 言不(盡) 二(會目) 散(歩) 咏(涼天) 夏(夜の素見) 還(愁) 獨(宿) 夜(お茶挽き)
 此法向(長安) 轉(樓の妓) 河(上空徘徊) 馬(を附) られた人) 欲(別) 牽(三郎衣)

(再會の約束) 歡君金玉(藝者の酌) 但聞人語聲(大引過ぎ) 双
娥幾許長(張見世の列座) 烟霞此地多(芳原の全盛)

○半風子を夷ぐる説

傳曰く蚤の埃より生じ風の垢より化ると其れ果して眞ある歟居士い
だ埃の蚤も化るを見せ又垢の風も化るを見せ然らば則ち埃の蚤も化ると
云ふの虚言あるか垢の風も化ると云ふの法螺あるか否々虚言もあらざ
法螺も非ざるべし何の証據あつて斯云ふか曰く一年煤はきを惰れば翌年
の蚤前年より倍し一月洗濯をふたれば翌月の風前月より倍す是も因てこれ
を考ふれば風と蚤の生るるの不潔も因りて何ぞや或人曰く風と蚤と共
も不潔も生る然れども蚤は元獸類も生じ獸類と喰ふ虫あり故も人体をし
て蚤も喰ひしむる者の恥なり風は然らば獸類も生ぜせして人間に生る故
も人間として風を生るるも敢て恥み非ざるありと其言一理あるも似た
れども抑々非あり何とあれば縱令人間も生るべき虫も致せこれとして

生ぜしむる者の不潔も原因す不潔人の恥べき所況んや半風先生のノソ
ノソ衣裳外も匍匐するも於てをや又况んや衛生流行の今日も於てをや蚤
殺さざる可からず風夷げざる可からざるあり居士の性質はさはだ半風子
を嫌ふ然れども家貧乏あると万事無性あるとに因て兎角も半風子を背脊
こもこと多し此半風子を背負こも毎又誠も肝癩玉も障ると雖も亦己むを
得ざる次第あり此頃少しく要用ありて某田舎も旅行して歸る其旅行中も
餘計の儲け物あり即ち半風子の背負こも是あり一日身体かゆきも堪やボ
リリ搔も猶痒く無茶苦茶も搔ども猶その痒きも堪や依て破れ着物を脱
で験一験すれば半風先生ノソノソ乎として縫目の傍らも逍遙すその數幾
千疋あるを勘定をべからず是も於て平居士大ぬも怒て曰くこの畜生め汝
ぢ爪の垢も足ぬ耳をもつて勿体なくも恐れ多くも此万物の靈長たる人
間様も喰ひ付き大切の生血を吸とり一生涯を氣樂の中も送らん杯どの誠
に以て不届き至極失敬千万の奴ありオノレ何するか我腕前を見よト乃ち

即決法を以て賤告して曰く其方儀爪の垢も足ぬ身を以て道樂賤生は喰
 ひ付だん實は言語同斷不埒の至り其罪輕からせ依て爪の頭押潰しの刑は
 處する者ありト賤告已に終り之を敷居の上より引出しその形容を見れば則
 ち満身くろ血を注ぎ威風凛々として恰も晋の豫讓が仇を趙襄子に報んと
 欲し身は漆して癩となり灰を吞て啞とあるが如き者あり身体憔悴あさか
 も屈原が將は汨羅の淵に飛込んとして澤畔にマゴ附り似たる者あり或は
 深草の少將が小町の許に通ふが如きものあり或はひの桃太郎が鬼ヶ嶋に威
 張が如き者あり居士これ等の半風子を引張出し爪殺する凡そ三時三十三
 分三秒時間ばかり然れども猶その十分一をも尽す能はぬ流石の居士も根
 氣つかれ爪頭より殆んど其爲す所を感ふ時鼻垂小僧あり居士は謂て
 曰く先生あんぞ迂濶あるや僅か一爪頭を以て數の知れぬ半風子を潰
 し尽さんと欲するの恰も一挺の鉄砲を以て世界中の鳥獸を獵尽さんとす
 ると豈儼おれば縦ひ千手觀音様の手て拜借するも決して之を爲し得べ

からせ爲し得べからざる手段を以て之を爲し得んと欲す宜ある哉根氣つ
 かれ爪頭の弱るや小僧薄馬鹿といへども之を學校の先生は聞くあり曰く
 昔し楠判官橘の正成と云ふ大將が千早の城に閉籠りし時熱湯を注いで敵
 兵を防ぎしと云ふ此策もつて此は施す可きありト居士曰く旨いかぢ小僧
 の云ひ草諺云く脊負た子に教へられて淺瀬を涉ると即ち是ありト急よ
 湯を沸し再び賤告して曰く詮議の次第これあり爪頭の刑を廢し更は熱湯
 注洒の刑は處する者ありと乃ち熱湯を打かければ半風子大どぢく小どぢ
 く悉く苦多張つたり居士これを以て妙計奇策とあしその後半風子を脊負
 こむ毎は熱湯を打掛てこれを殺す一日某老人あり居士は謂て曰く君半風
 子を脊負こむ毎は熱湯を以てこれを喝す其策や新發明は非ぢと雖も亦輕
 便法あり然れども元來半風子の生ゆるや其罪の半風子にあらせして君を
 の罪を構造するあり何故とあれは君常は洗湯は浴せせ又着物を洗ひ是
 を以て身体に垢を積着物の膏は染あかトあぶらト嗅氣を合併して恰も半

風子の養育院を設け置が如しあんど繁殖を欲せざるも得んや君自分でこの養育院を設け置がら半風子が生長すると之を嫌がって熱湯を打かけるは是れ孟子の謂ゆる弈を國の中よ作る者か半風子もし人語とあさば必や冤と訴ふべし君もし半風子を嫌はば毎日〱洗湯よ入てよく身体とあらひ又とき〱着物と洗濯し而してのちよ之と嫌ひ之と惡むべきあり大學よ曰く其本亂れて末あさまる者否と君少しく此邊と思へと居士曰くナール程

○道樂書生の故郷に歸るを送る序

時これ暮春。溼陀の櫻花ハ已に飛で黃鳥恨みを訴へ。堀切の菖蒲ハ將に咲んとして遊客杖を曳き。昨日の拾ハ今日ぬぎ棄て將に紺飛白の單衣を着んと。此とき友人何某。故郷より度々歸國を促すよより據ころあく花の都の東京を出て故郷に歸らんとす。依て僕々居士友達の好味を以て之を牛店に誘ひ一鍋の牛肉と一合の酒を以て其別れと送る且つ告て曰く僕と君と交際

を爲す茲に年あり君ハ僕と以て弟の如くし僕ハ君を以て兄とあもひ其交りの深密ある縦ひ桃園ハ兄弟の杯と爲さるも亦これ合縁奇縁あり是を以て僕ハよく君が平生の行跡を知るあり故に僕ハ余計にあ世話をがら君が是までの体裁を述べ以て君が故郷に歸るの荷物とあし併せて後來を戒めんと欲するあり請ふ君耳糞をホチ線てこれを聴け君それ試みよ思へ君故郷と出るとき大言と吐て曰く大魚ハ小池ハ棲を断然國と去て京よ上れり京よ上つて見れば雲泥月露の相違よして曾て國よ在て想像するの比よあらず故よ自ら大魚と氣取といへども誰一人相手よする者なし是蓋し大魚よあらずして大魚を氣取ればあり是よ於て乎少しく覺悟する所あつて勉強心よ起し二圓五十錢の寄宿料と一圓の月謝とと擲抛て法律學よ志さず其時僕ハその志と賞し且つ以爲らく日あらせして法律博士の出來するや必せりト然るよ諺よ云ふ朱よ混れば赤くあると宜ある哉君もまた情怠書生よ交り初めしより終よ無頼よ變じ朝よハ揚弓店の醜花よ戯む

れ夕又へ地獄宿の臭風も嘯き或ひ根津の切見世も飛こみ或ひ芳原の
 小格子と素見し毎日毎夜放蕩とのみ是れ事とし復た翻譯書一冊も披き
 見せ所持の衣服の悉く賣り拂ッて殆んど裸体とされり其頃君が様子と見
 れば頭の髪は滅法界なぐくして團十郎の石橋の如く口髯の矢鱈も生かし
 て菊五郎の鬘羽も似たり見る人君と指て白晝の化物と云ひしハッボシと
 評したる者ありと思へり校長も亦その懶惰にして與ふ法律と語る可から
 ざるを覺りて放逐と喰ひす君放逐と喰ッて據ころあく身と下宿屋も投じ
 まゝ某家熟も通學すといへども胸も漫こみし腐れハ抜去る能は地獄屋
 の思ひの日々暮り下宿屋の拂ひハ月々嵩むも至り國許の人々も亦君が放
 蕩と嗅附たるを以て少しも學資金と送らせ進退これ谷り思案工夫も附ざ
 る有様なりし併しあがら天道様ハ人と殺さず昨日ハ東街も居り今日ハ西
 坊も移り随ふん下宿屋と喰倒すと雖も幸ひ命も別條なくグッく然ッラ
 ブラ乎として面の皮あつく又幾年の星霜と徒費し終も今日の歸郷も及べ

り嗚呼君ハこれ破戸兒の卒業者と謂ふべし然りと云へども君が故郷と出
 る時と追懷それハ此破戸兒の卒業と望まざる者あるべし是れ畢竟腐女子
 の爲も大切の前途と誤まりしハ實も憫然ある話しからせや啻も憫然ある
 のみからせ又國の爲も惜むべきなり僕己も君が憫然なると知る素よりこ
 の小言と吐て弱き者と挫くと欲せざと雖も其實止と得ざるあり何故とあ
 れば書生國も歸る後ハ滅法界ある大法螺と吹て田夫野人と瞞着もの往々
 として之あり君もまゝ其大法螺と吹て國許の人々と瞞着さん事と恐る故
 ゝ君が是までの体裁と棚卸えて其田夫野人と瞞着すと豫じめ防だんと欲
 するあり夫れ某君も既往の事ハ何程グッ附も追べからざれば之ハ太平洋
 の真中もブン流したハ以後と慎むの外なきのみ君宜ろしく後來と慎むべ
 きかり君故郷も歸らば斷然性根を入替て謹慎の人とあり法螺と吹せ高言
 を吐き眼を人並の書物も晒し以て廿三年の春を待べきかり僕君と別るも
 臨むて他も告べき事あり誰是のみあり某君々々國の爲も自愛せよ

○蚊と蚤とを戒む

汝ぢ蚊や汝ぢの元來腐敗の水の中は生じたる化物にしてその腐敗の水の中はありし時の足も亦く羽も亦く唯ゴヨ〜として意愚痴も亦かりしは此頃俄は足を生じ羽を作りしとて漫りよブン〜威張り廻り我々の勉強を邪魔するのみあらせ行あり人よ喰ひ附て生血と吸ふとい豈はこれを不埒千万と謂せして他は不埒千万と謂ふものあらんや汝ぢ蚤や汝ぢ元來埃の中は生じたる化物にして其埃の中はありし時の目も亦く口も亦く唯フラフラとして意愚痴も亦かりしは此頃俄は目と生じ口も出来たりとて漫りよブン〜飛び廻り我々の安眠を妨害するのみあらせ無暗人よ噛り付て生血と吸ひとるとい豈はこれと不屈き至極と謂はせして他は不屈き至極と謂ふものあらんや汝ぢ蚊や汝ぢ蚤やよく〜其本を忘れず其生立を考へ少しく思慮する所あれ汝ぢ若し思慮せんば烟を以て之を攻め火を以てこれを焼き爪を以てこれを殺さんとす汝ぢ蚊や汝ぢ蚤や若し我戒しめ

を悟る能いんば請ふこれと造物者よ問へ

○新撰變語集

- フランテケール(果報者又の間拔) ザマミロ(愚弄する) エ、コ、ナンダ、ペ
- ランメー(不満の貌) コツペークセー(嘲る) ナイテミーセル(娼妓) ノムト
- ヨウウ(酒) イヨウ(期間) オト、ヒコイ(薄情) ツキオチー(書生) ヒヤツ
- コイ(氷) ヨムトワーカー(書物) ツケルトヒーカー(らんぶ) ナ、ナール
- ホド(感心) クレルトイ(纏頭) ヒカルトナール(かみあり) コンパンアリ
- イ(藝者) クモルトフル(雨) ゼツピ(入らツしやい) デ、ユケー(勘當) オ
- ヤ(膽を潰す) クヤシイ(残念の顔) モリツチエー(蕎麥店) ツマラチー
- (退屈) ヘンサカホーイ(荷車)

○道樂のお休み

客あり居士よ謂て曰く君の元來指折の道樂者有名の酒ア突にあらせや然るよ近頃一言のお恍惚を聞かまよと半句の自惚詩文をも見せ芳原の夜

ざくら黙然て過去り兩國の烟火又偶の音も出さず仲の町は燈籠を點るも
 また格別面黒話し無きものゝ如し夜櫻これを見ざる乎烟火これを知らざ
 る乎燈籠その噂を聞かざる乎かんと俄に腰拔となり盆庫となるの甚だし
 きやト居士曰くオット皆まで宜まふナ居士と雖も男一疋の資格あれば道
 樂の氣力あんど衰へん乎また腰拔盆庫とあらん乎然り而して近頃ノロケ
 を饒舌らば夜ざくら燈籠の批評を下さざる所以の者ハ之を知らざるの故
 又あらや又これが噂を聞かざるの故又あらや別ハ其仔細あつて何とも云
 へざるあり其仔細ハ如何なる所謂因縁かと云ハ先づ斯様を譯ありエヘ
 ノ夜櫻や美且つ艶あるハ論を待た然れども唯ボクハ花の下ハ歩行し盆
 槍ゆびを咬へて他人の愉快を傍觀するも何の面白味あらんや花を賞すれ
 バ茶屋の二階又賞すべきあり烟火も随分美事あるハ知れ切たこと然れど
 も野痴馬連は交り玉屋鍵屋の大聲を發するも何の面白味あらんや烟火を
 觀んと欲せば宜しく家形船は乗べきあり仲の町の燈籠や中々立派あるべ

し然れども燈籠の正面は立ち一々その畫様を記憶するも何の面白味あら
 んや燈籠と觀るときハ其畫様と觀ざるも宜しく後ろより之と覗くに如ざ
 るあり其茶屋の二階又賞し或ハ家形船は眺めんと欲すれば相應のお金と
 放り出さされれば能はざるべし夫れ然らば則ちその愉快と極め道樂と
 爲さんと思ハ先づお金と用意して之と爲すハ是れ至當の順序ありその
 お金と積ハ勉強ハ在り家業と勉強してお金と積これ亦至當の順序あり居
 士近ごろ此順序と悟り道樂を休業とゆえ又面黒話しなくまた饒舌り種な
 し矧んや出来やすきと似て出来難きものハ道樂の資本金あり出来難きと
 似て出来やすき者ハ借金ありまた矧んやロスコ其人の如き化學者と雖も
 文久錢として壹圓の金貨と化せしむ可からやロビンソン其人の如き算盤
 玉と以てするも借金として貸金と變ぜしむる能ハ居士も此ハ殆んど
 困却するありと云ハ客曰くあんだ面白くもねハ又泣き言かと仕噺面し
 て歸り去る居士大口と開き吐鳴て曰く登樓の金出来れば以て道樂と尽す

べし登樓の金尽れば以て泣言と並べるべしと遂に去て復た共云ひ

○芳原のある娼妓の頼みよ應じて作る算へ唄

一つとや ひと度逢たが縁のはし。初會ばれ。またの逢ふ瀬と樂しきみよ。

朝別れ。 評オヤ察しまと

二つとや 夫婦やくそく末永く。かわらじと。起証誓紙のとりかわせ。念

のため。 評オヤお固いね

三つとや 見世の格子よとりそがり。まがみ附くるかくと心まち。た

たみ算。 評オヤお待遠

四つとや よんで嬉しき親切な。ふみ文句。口よい出さねと何となく。笑

ひ顔。 評オヤお樂しみ

五つとや いつもの座敷でさしむかひ。ほんのりと。酔たまざれの痴話

ぐるひ。お樂しみ。 評オヤお羨まし

六つとや むりよ引とめ居續けの。よくないと思へどかうちりや是非

もない。お察しよ。 評オヤ程よ志な

七つとや なじみのお容の多けれど。打とけて。心を明その主ばかり。嘘

じやない。 評オヤ本かいあ

八つとや やかましい程朋輩の。そねみ言。あげたり下たりなぶられて。

そより泣。 評オヤお惚けかへ

九つとや 戀と義理との二筋よ。からまれて。きるみ切られぬ縁のいど。

切らせぬ。 評オヤお深いね

十とや 當時はやりの丸鬚よ。かみ結ふて。ふたりで中よく暮したい。

あもて向き。 評オヤお最も

粧座魔子評 多年経験の口を以て満肚のお惚けを説く金吉と

の人も亦應よ腸を斷盡とべし

○旦那と權的との悶着

給金の殘額請求の訴へ

鼻野下區乾上り町始終苦番地弊民

原酷 粹野 豆

唐威張區影辨慶町意痴番地死族

被酷 頓田 惚助

右原酷お豆中し上奉り原酷が被酷と條約を結び被酷の意は随ひ毎月五圓の手當金と請取べき筈にて約定証書と取かはせし即ち迷痴重質年碌月として爾來造次も顛肺も被酷の機嫌と取し其當時被酷が鼻下と長くせしを以ても明々瞭々ありと而して其はじめ互ひ取替せし証書之寫し即ち左の如し

甲第一號

雇人契約の証

一拙者儀その元おらび父母も得心の上本月本日より雇ひ入れ手當金として毎月五圓ツ、給與の約束と爲ること實正あり然る上月々

三十日と限り之と渡そべし苦し一ヶ月までも延滞するときは無沙汰よて飛出すも決して苦情を問敷こと云のざるべし兎もかく約定と爲る事仍て件の如し

迷痴重質年碌月

粹野 豆の 頓田 惚助 印

みぎ約定証と受領し被酷の家に至りしも被酷の本妻が甚だしき焼餅やきよて何よつけ蚊よつけ原酷と邪魔よして兎角よ出て行けよがしよ仕向るゆゑ如何ある鉄面皮の原酷も其情よ堪がたきより都々一氏の所謂「トシ」た事からツイ摩合てクワットもへ立はや附木」云ふ様な事も問々出來るも素より先ハ立派お家附の奥様の事ゆゑ迎も其勢ひよハ勝べからざるより當時旦那おなはち今の被酷よ泣附たるところ被酷もその情と察し一時破縁のことで取扱かひ内々何助よ別居し都合よき日曜おと面會せる事よ約束したるハ即ち同年苦月なり

右別居するの素より表向きと繕ふペンキ細工の約束あれども若しや之と表裏とも履行されての思の乾上るも計り難しと心附しより被酷の迷惑がるのも構へき再び契約と請求したる處被酷の苦い面附を仕あぐらも之を承諾し一筆書して渡し呉たるゆゑ之を請取置たり其証の寫し左の如し

甲第二號

契約証

一今般お多福のチンく筋よりその元と一旦手切の事と致とも是の表向きのみよして其實の何處か小意氣を家を借りこれよ住居せしめ是迄と少しも替ることなきの勿論よい條念のため安心のため一札を渡し置こと仍て件の如し

迷痴重質年苦月

頓田惚助印

粹野お豆どの

この証書を領收し間もあく某町に引移りし處その當分の被酷も都合よき

時雨風も厭ひ來訪せし追々秋風も吹廻され且つ何れへり増を花の出來しと見へ少しも顔を見せざるゆゑ實の病氣もても有らんりと女心の狭きより色々餘計な心配し夢見も悪し辻占を買て見ればダメダヨ杯と云ふ文句よつき益々氣よりくるゆゑ病かよ偽名を以て郵便を差出し又ハ使を遣て來訪を促とも鉄砲玉と申さうり脚の路切と云はふか何の音沙汰もこれなきのみあらぬ給金もぬい延滞し米屋の責かける料理店の押て來る貸本屋やら家賃やら入替り立替り催促のくるし紛れ最初の中筋の帯を一筋六一屋へ送り又ハ商賣道具の三味線を賣り拂ふ等よて一ヶ月餘りを支へたれども素より借老同穴天長地久と云ふ深い義理を盡し可き譯柄もあらざれば寧ろ被酷の内へ怒鳴りこみ縦令手きれ金と行かせども給金だけの満足よ請取らんと已よ出んど爲したれどもイヤ先の名よおふ立派や旦那殊よ無暗よ怒なり込みユスリやカタリと思われてハ此峰とらぬの氷の泡あれバ只おとちしく持掛るよ如きと思慮し此旨

を委しく手紙に認め借金の残らせ被酷にナスリ附け親元へ歸りしに昨年
誤月の事としてその砌り迄の給金を合計され八拾圓にこれあり而して
其のち五月蠅くも被酷へ催促されども被酷の馬耳東風蛙の面は水にて平
氣の平左のみあらき或の原酷が無沙汰に去しの又の原酷が日頃兄だ
と云ひしに全く原酷の情夫で有りし杯と種々さまざまの口實を設けて
逆捻を喰ひし原酷の給金を踏倒さんとするに誠以て不當の振舞且つ馬
鹿よせらるるに殘念の至りよ座の間被酷呼出しのうへ相當の裁決
成し下され度この段ねがひ奉り也

迷痴重苦年似月

右
粹野お豆印

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇殿
給金の殘額請求の答へ書

唐威張區影辨慶町意痴番地死族

被酷 頓田 惚助

右の原酷鼻野下區乾上り町始終苦番地弊民粹野お豆より相係る給金の殘
額請求の儀につき面倒臭い事あら一通り答辨し不手くされ阿魔の後來
をいましめ且に給金殘額請求に應じ難き旨申しあげ度いあひだ依怙負最
あくおん聞き取の程ねがひ奉りいそもく原酷が甲第一號証として提出
したる雇ひ入れ契約証の如何様被酷より相渡したるも之を以て本訴の要
點とせるに誠譯の分らざる次第之あり何とあれ右証書を渡その砌
り彼よりも一通取おきたる証書あり其寫し左の如し

乙第一號

約定書

一私し事仕合せも且那樣の目鏡に叶ひより兩親も得心づくよ
て今日より旦那様のお傍使ひと相成し處決して嘘や常談よハ座を

く又毎月手當金として大枚金五圓ツ、頂戴の滲約束は座は然る上
の浮氣ケ間敷ことの中を及ばせ決して外は色男や間夫をどの拵へ
間敷にもし万ケ一何いふ表裏の瓢箪から右様の振舞は座は節の如何
様の滲處分は相成いとも素より愚痴の覆を問敷によつて後証の爲め
如レ件

迷痴重質年碌月

頼田惣助

粹野ふ豆印

該約定書を受領し被酷の家は連れ行し處兎角は内輪もめの致しはより原
酷の陳述せし如く某町は別居せしめたりしは其當座の一より十まで旦那
様くど尊敬し格別の尻尾も見せざりしが追々我儘増長し我より外は女
あしと云ふ有様よて毎日割烹店より種々様々の料理を取りよせ或は鱈或
はかば焼あるひは天麩羅或は蕎麥あるひは何或は何と勝手放題の贅澤を
盡し自ら之を喰ふに宜しけれども其七八は親元へ運び剩さへタマの

休日又保養と出掛ければヤア帯が切れたの着物があいのと遠廻しは子ダリ被
酷は餘計な散財を掛たるも亦少あしとせせ加ふるは人の噂を聞は毎日の
様も若い男が出入りするとの事よ付開は怪かること何奴ある歟と原酷も
尋問せし處原酷は何喰ん顔よて彼れは私の實の兄ありと答へし故被酷も
敢て疑はせ打捨て置しは世間の評判まよく高く且つ友人中より忠告を
得たるより兎に角實際を見届け呉んど一夜彼が門前よ立ちて窺ひしは案
又違ひは情夫ゆゑ直に飛こみ拳固の一ツも喰ひし呉んど思ひしかど心の
腐りし者を今更兎やかく云ツた處が到底無益あるべしと斷念し只一書の
中に離縁の譯柄と認め格子の内へ抛こみ置きて歸宅し夫より一寸も顧み
ざる儀にこれあり扱みぎの如く自ら約束を破りながら鐵面皮にも給金八
拾圓を請求する杯と以ての外不埒千万不届き至極失敬の至り言語同斷
の奴に付被酷は原酷の請求に應じ難くはあひだ何卒至當の娛明斷を仰ぎ
度い也

迷痴重苦年似月

頓田惚助印

百四

○○○○殿
半穴書

鼻野下區乾上り町始終苦番地弊民

粹野お豆

唐威張區影辨慶町意痴番地死族

被酷頓田惚助

右原被酷の間面白くも無い悶着を生じ酢だコンニヤクだと水かけ論の
未當〇〇へ擔ぎ出し恥外聞にも構はず明断を仰ぐとの願ひに依り双方の
勝手理屈を聞糺そに抑々原酷が要求する所の給金の残額の大枚八十圓
にして請其求する趣意を聞くに原酷の迷痴重苦年碌月被酷より甲第一號
証を受領し毎月五圓ツの約定を以て被酷の雇ひ人として爲り該家に到りし
も兎角に内輪の治らざるより又甲第二號証を取り他に別居する中被酷に

於て秋風を起し外も増花の出来しより據ころさく其別居を片づけ實家へ
歸りたれども其歸るまでの被酷は雇ひれ中ゆゑ其給金の被酷は於て辨償
そのの義務あり原酷は於ての請求するの權利ある旨を饒舌り付たり而し
て被酷の答辨は原酷が被酷は雇ひれし其當座の一から十まで至極都合よ
く相勤めしも追々日柄の立又従ひ我儘増長し剩さへ曖昧者を引摺こみ被
酷の顔へ泥を塗しのみからず乙第一號証の約定は違背したるものあれば
八十圓の扱あき目腐り錢一文も與ふるの義務なき旨の理屈を並べたり
右眞理を遂るところ被酷は於て原酷の爲に眞實を盡し甲第一號証の義務
を守りたるに即ち原酷をして別居せしめざるの一事を以ても明瞭ありと
そ然るも原酷は秋風を起し云々と陳述するも原酷は於て曖昧者を引摺こ
みざるに被酷の提出しざる証據物に依りて認定を果して然りとせ
ば原酷は乙第一號証を決シテ外に色男や間夫杯ハ拵ラへ間敷ハモシ万々
一何イフ表裏ノ瓢箪ヤラ右様ノ振舞座ハ節ハ如何様ノ處分ニ相成ハ

百五

モ素ヨリ愚痴ハ覆ス間敷云々と約しあざら實兄と偽り被酷を欺むさる
 の自分で穴をほり其穴は飛込ると同じき者もて早く云へば自業自得
 り且つ甲第一號証を閲するも其文中一ヶ月ニテモ延滞スル時ハ無沙汰
 ニテ飛出スモ決シテ苦情ケ間敷トハ云ザルベシ云々とこれあり然らバ一
 ケ月もても給金の延滞と生じさる時ハ直様尻は帆と掛ケ駈出とべき至
 當なるも何時までもペン／＼ダラリと被酷の給金を當にえたるハ餘り目
 先の利ぬ事と云ふべく又商賣柄も似合ぬ儀と笑ふべきの外なきのみ
 らせ自ら權利を放棄したる者あれば被酷の其請求も應ぜざるハ至極尤も
 千万あると以て原酷の要求の理由なき者とせ

但し該件の諸費ハ原酷より辨償とべし
 迷痴重苦年産月

痴安妻半所印

○癡遊の歌

居士ヤそこの歌ハ逸齋夢中兄貴の作あれども餘り面白さま

此草誌中も放り込しなり

天よハ癡遊のみにたらん
 癡遊ヨちゆうノウウチゆう
 きのふや今日の中あら
 この世ハあるか未來まで
 何のみだりにやぶるべき
 あすかのかはと同じにて
 お話し申せばあざきこと
 ある友だちと女郎かひの
 あまこの金をつかひ棄て
 金のなる木もつごどく
 昇りつめたるだんむしご
 果ハおやも見はるされ

地ハ癡遊のひとたらん
 おまへと私のそのあか
 二世も三世もそをかくて
 云ひかはしたる約そくを
 左ハ云ふものゝ人の身ハ
 淵瀬さだめぬものあるぞ
 まだ痴遊子ガわかきとき
 つきあひえたる始めにて
 全盛きわまるありさまハ
 歌舞の菩薩ようかれこみ
 下るひまなき居つゞけの
 たよりと思ふ女郎よさへ

振棄てられしを慙れある
家督をつぶそ小せがれ
われのかとくと愛する
家督をまもるためあれ
もらふて家をつがすべし
親父をだましかね得んど
度く食ひし胡麻菓子
親父のいかりの火の如く
頭上にとゞろく許りよて
逐いだされて縁者よ寄り
あはれを茲にとゞめし
自業自得と云ふべけれ
金とちやとに棄てられて

その親たちの云ふことに
餘儀なくこれを勘當せん
小せがれよりも甚はだし
他人の子でもいとひかく
それと知らぬ痴遊子の
種々よ手だてを廻らせど
如何でまたもくらふべき
また百雷のおちかき
最と恐ろしくも痴遊子の
落ぶれ果てし居さうらふ
誰をうらみんだうらくの
嗚呼わらふべし痴遊子が
道ふみまやふ意苦地をさ

毎日うつくものおもひ
あみだの雨よそでまぼる
痴遊の爲めよ昔しより
身を割ふくくびくより
前非を悔ひて身を慎しみ
歸参するもの少くあき
人の老ゆると云ふもの
辛抱せよかしもろびとよ
余この文をかきをはる
ねぶりをさまそ鼠のこえ

胸のくもりのはれ間さへ
ころろの中を馬鹿くし
人をくるしめ身とそこね
無理心ぢうをそるもあり
あつぱれ辛抱した上よて
實よ無理あらぬ事ぞかし
身を損ねるのかけはしぞ
助倍をよと云ひるな
ときしも隣りの座敷よて
最とむつましく聞へける

○益倉子はじめて芳原よ遊ぶを送るの序

痴惠野 拔作 益倉居士 ちまい きよも 道樂の仲間入をあしお袋の臍線金をもち出し 將よ芳原よ飛込まんぞす依て自笑居士 極内々よその袂をひき之よ

告て曰く拔作子よ子の元來尻痴がたき性質ゆゑ未だ一寸も芳原の土地を踏ま未だ一度も女郎買をささざるや必せり果して芳原の土地を踏ま女郎買ひを爲せし事あければ万事不案内諸事娛承知あきこと君が心底を聞きして明々瞭々あり若しそれ諸事不案内郭中の様子を心得てウカ／＼此地よとび込パ畜は膽玉を潰し大恥を搔くのみあらせ鐵片の磁石も吸取るゝと同様にして十圓ある者の十圓五圓あるもの五圓残らせ吸とられ安戯樂閑とあるの當り前の事にして昔し紺屋の職人が十圓を懐ろにして高尾を買ひ以て三年の戀情を遂るのみあらせ高尾も見込まれて思ひがけなき夫婦とあるが如き馬鹿正直ものゝ當節の藥も仕たくも之あきあり故に居士の君が大切の臍くり金を吸取れて安戯樂閑とあるを可哀想と思ひあらまし其譯柄を説き聞さんと欲す拔作子よ請ふ耳糞をホヂクツて宜く聽たまへ夫れ芳原の日本國中第一等の遊郭にして女郎屋も澤山あり女郎も夥多あり而して別嬪ありお茶ツピーあり素尻多ありお多福あり出ツ

齒あり獅ッ鼻あり痘痕あり其面付いろ／＼様々にして恰も一山百文のおもちやの如し亦大層ある場所あらせや而して大門を這入れバ兩側も引手茶屋と名けるものあり此引手茶屋も入る客の大層また中樓も遊ばんと欲する大盡株もして君が如き素寒貧の行べき處もあらせ且つ大層および中樓へ迎も君達も遊ぶ處もあらざれば是の措て語らせ今君達もあそぶ可き所を指定すれば京町か將た角町川岸の小格子あるべし然れども此小格子の子の人を欺むき人を詐りり囊金を吸取るの却て大樓中樓の上もあり是を以て其あそび方も慣を其危則を知らざればステキ滅法界目の栗玉のとび出る災難も逢事まゝ之あり注意せざるべけんや去ながら手輕も遊び安直も愉快を爲すの小格子を措て外も無かるべし依て小格子の遊びかゝ及び危則を誤傳授中さんと欲す拔作子ふたゝび耳糞をホヂクツて聽け京町すみ町あぞ小格子の前よてたもとを牽て頻り登樓をそゝむる者あり曰くお手輕も如何様ですエへ、へ、へ、決して多分の散財の掛ませんエ

へ、へ、へ、斯様も花魁も並んで居りますへい、皆お部屋がわいて居りますへい、如何様でそエへ、へ、へ、へ、ト幾度か一ツ言を繰返し上邊も愛嬌を飾り内心のペラを狙ひ獨り饒舌りひとり返答すこれを立番まど妓夫と云ふこの立番の云ふ所を決してあてまならせ所謂でたらめ出放題のみ君その言を信じて叨りよ飛込むあかれ是れ用心すべきの第一あり又初め安直手輕の約束を爲し樓に登つてのち無暗酒肴とすゝめ逃へもせぬよ肴をはこび云附ざるよ酒を持來り人をして酔しめ而して翌朝もありて勘定書を見ればそのノ高約束の五六層倍の上よ出づ粹子これを稱してポリ店と云ふ蓋しボリの暴利の謂ひなるべし田舎漢あるひに未だ女郎買あれぬもの往々よして此暴利を喰ひ小馬鹿よされる事あり是れ用心すべきの第二ありまた格子の前よ立ち敵娼を撰抜するよ當り小町揚貴妃の美婦と認めこれを買ふ約束を爲し引つけ已よ終り座傍よ來るとき能く、其面を検査すれば痘痕の凸凹あるひに皺苦茶の婆さんある事あり是れ用心

すべきの第三あり又鼻の下を伸し涎を垂れば敵娼はやく其野呂間あるを認め樓母よ十錢やつて下さい若い衆に若干遣て下さい鮎をお取りあさいナ菓子をおたべあさいナ杯と色々の巧言を以て財布の底を叩かしめんと欲すと云へども其もどめよ應じて之を爲せば却て野呂間と笑われ頓間と嘲けらる故よ初會より大尽を氣取て財布の底を拂ふの恰も河童に向つて尻を出すよ異あら是れ用心すべきの第四あり敵娼手とりある時ハ難と云ひ艱と云ひ翌朝去るよ臨んで居續けをすゝむる事あり然れども初會より居續けを爲すハ野暮の極點よして恰も鼻下長の金看板を出すよ異あら是れれ用心すべきの第五ありその外用心すべきこと誤傳授まうす可き事たくさん有といへども悉皆之を申し述るも逆も記憶ハ出來ざるべし故よ一を以て十を推し今夜實驗のうへ合點のまぬらざる事あらバ明日居士よ就てこれを聞け居士ハ其答辨を密まざるあり逝や盆倉居士決して甚助をあこし廊下鷲とあるあかれ

○凡太樓主人よ與ふる書

不稗的の隊長武骨もの親玉。自笑居士。おそれくつしみくへの字の如く尻つく張り一書を凡太樓親方の膝下呈す今年如何ある間違ひか天地の神々様殊の外に機げん悪く氣候不順にして毎日あめ降ること淋的の小便の如く天氣の雨降りの一割も當らぬ神佛の縁日の皆め茶とちり夜店の商人のことくく乾物とあらんとし百姓の田畑を耕そ能はぬ商人の品物を賣る能はぬ不景氣のうち不景氣をかさね歎息の中歎息を増し青息の中あを息を吹き困難の中こん難を加ふ然れども土用入りしより此かた天道様の汚機嫌すこしく宜敷をくはへ日輪様のお顔を拜するを得て万物みあ氣分を取あはし蟬の氣候よつれてミンク鳴はじめ氷賣りの氷の呼聲を絶ざるのとき主人相かはらぬブラシヤラとして大切の光陰を費し恥も外聞も頓着せざる段大慶至極珍重の儀も存じ奉らぬ随つて居士も呑湖のシヤアを極こみ例の如く彼的の爲も苦勞し文の往復の

ためよ時間を費やし毎日々々借金と言譯をいたし居りしあひだ憚りあぐら餘計を事あぐら安ん心を請ふ就て此此の炎暑まことよ以て堪がたく恰も熱焼地獄に墮落せしごとく迎も澁團扇一本手ぬぐひ半筋ぐらぬを以て凌ぐ可からざるあり依て本日ひる寐の暇結構千万の一策を考へ出しこれを主人よ相談す主人よろしく賛成せよ扱その妙策の他ああらぬ二州橋の下に納涼を催はす是あり主人もし居士の此思ひ付を賛成せば先づ取あへき屋根ぶね一艘を備ひ藝者兩三名を招き淡白の鮮魚いろくど上等の和洋の酒ドツサリとを用意し綱引あどおし付の人力車を以て居士と招待そべし然らば居士も面倒あぐら玉歩と枉て一杯飲で遣はさん尤も勘定に居士一文も出さざるゆる其邊の誤笑癡のうへ色よきお返事と乞ふ自笑居士謹言く頓首く目出度りしく目出度りしく

○書生道楽怪傍聽錄

戲事規則

第一條 この怪の有志道樂者の爲め設く故み吝嗇坊不粹的の如何ほど仲間入と申し込も之と謝絶す但し怪員二名以上の口利ある者の此限もあらぬ

第二條 怪戲の誤語意痴時より起り誤語苦時終る但し戲事の都合よより戲長あその痴間と伸縮す

第三條 怪戲の傍聴とゆるすと雖も昔し固氣の親父の眞平は免とす尤も粹の粹通の通の之と許すこと有べし

第四條 戲員の席次の抽籤と以て定むこれ榮枯最負あく公平主義は因奇り而して天狗了簡と高慢痴機と依り勝手次第人の風上は坐る者の

戲長これを罰するも拳固二三と以てす

第五條 戲事中は戲員さつま芋豌豆まめと嚙り又居ねむりと爲す等のを都度く戲長の笑諾と經べく之と背くもの一回登樓と休ましむ

第六條 戲事中は戲員が自腹と切て酒と飲また恍惚と吐く等固より妨げあしと雖も悶着と始め腕力も訴へる等のこれを嚴禁と蓋し戲事を邪魔すればあり

第七條 第六條末項の場合及んで之を衆戲員も問ひ之をして大遣も放り出さしめ而して尙こりざる者のコツくあぐり附る

第八條 この怪戲を分て二類と爲す一を通情怪と云ひ一を吝嗇怪と云ふ通情怪は戲員の財布あたふかなる時これを開き吝嗇怪は一文あしの時これを開く

第九條 怪戲をひらくと當つて戲員事故あり出席せせと云へども他の戲員登樓の確定費および其外の頭割勘定の決して否應を云ふ可からぬ

第十條 戲事をひらく時戲長の書記をして戲事案を朗讀せしむ

第十一條 戲長の戲員中より投票を以てこれを定む尤も戲長の餘り骨のをれる役もあらざる故出愚の坊を投票するも敢て差支へあし

第十二條 戲事中は發言せんと欲する者の突立て戲長とよび戲長の笑認

を得て吐鳴はじむべし若し二人以上誤多々突たつ時ハ戯長ハその中の一人をして饒舌らしむ但し褒貶欺譽ハ渉ると雖も下司根性を出し脹面を爲すべからず

第十三條 戯事中一問題の畢らざる間ハ外の問題ハ就て餘計なる饒舌りを始めざるを許さず但し非常の迷説ハして特ニ戯長の笑認を得たるもの此限ヲあらせ

第十四條 戯事中ハ何の誰兵衛おんの何右衛門君おと長たらしき姓名を呼びして戯長またハ何番戯員と呼べし

第十五條 戯事饒舌りくらの未可否を決するの法ハ各戯員をして突たしめ其突たつ者全員の半分ハ過れば之ハ決す若し半分ハ満ざるときハ屁消とす但しヒヤ々ノウ々の言語を以てする者ハ賛成員と不同意

とハ拘らば可否決の勘定ハ入れず
右戯事規則十五ヶ條を取極の後規則第十一條ハ基き戯長を投票しまた第

四條ハ依て抽籤を以て戯員の席次番號を定む其人名即ち左のごとし

戯長 和氣若亂
番外意員 彼加雄内
全 會禮茂餘加郎
書記 骨 聞取 早
折損 太

一 番	口先 輕	二 番	牟田口勇藏	三 番	譯尾菊雄
四 番	迂曾尾突助	五 番	馬井話太	六 番	小松田紋太
七 番	面白勘兵衛	八 番	鼻野下長	九 番	阿波吹助
十 番	劍吞九郎	十一番	居殘番太	十二番	平氣野平左
十三番	馬尾枚高	十四番	苦田卷右衛門	十五番	財布唐之助
十六番	花肌助平	十七番	何野良軒	十八番	朝起遲
十九番	借金有藏	二十番	河井惣太	廿一番	左氣呑体
廿二番	名佐氣寧	廿三番	是輪機体太	廿四番	附合屁太
廿五番	會禮見高				

戯員の席次番號定まりしを以て各々やぶれ袴を穿て戯事堂へ出て席へ就たり時又戯長の高慢面をして曰く此度の如何なる間違ひか諸君の投票も依て戯長の重荷を擔がされたりと雖も僕も諸君も渉存じの通り問拔の親玉ぼんくらの開山されば定めて失策遺損ありも多かるべければ大抵の事の大目を見ておとがめ無き様願ひたし扱今日諸君も已に渉笑痴の通り通情怪の開怪日あれば先づ原案の第一條より逐條審議し我々道樂仲間便益を計んと欲すれば諸君の遠慮會釋かくお戯舌あらんことを乞ふ尤も一次會だの二次怪だのと面倒臭い事廢止して十抱一からげの手輕も遣かす見込ゆゑ諸君もそのお積り願ひたしト乃ち書記をして原案を朗讀せしむ曰く

登樓手續及豫算額徴收戲案

第一條 この道樂怪員として登樓を爲す時各々金若干を出し怪計委員をして其勘定を爲さしむ但し怪計委員の戯員中より之れを撰

拔す

戯長(和氣若亂)曰く諸君この原案も就て少し分あらば饒舌らるべし一番口先輕曰く原案を賛成す五番(馬井話太)曰く僕も番外意見もお尋ね申したき事あり元來この怪計委員の通情登樓も用ゆる歟將た吝痴登樓も用ゆる歟番外(波加雄内)曰くこれの通情と吝痴とを論ぜを撰拔の積りあり十七番(何野真軒)曰く原案を賛成す戯長曰く格別異論なき様あり依て原案賛成の者の突立たまへ起立十五名あれば過半數もよつて原案も決す次で第二條を朗讀せしむ曰く

第二條 登樓を爲さんと欲する者のおの金一圓を出し怪計委員

をして之を仕拂はしむべし而してモシ殘額あらば其翌日又至て出

金者も割戻すべき事

七番(面白勘兵衛)曰くこの原案を議するも先だち一寸番外も質問せん第一この登樓と稱するの大離か將た小格子か第二この費額中も往復の車代も

よび朝飯代も見積りあるか番外曰く敢て大籠と小格子とを分たせたい登
 樓者多きとき其集金も多く登樓者すくあき時其集金も亦随つて少し
 故よその集金の多きとき大籠は遊び集金少きとき小格子は噪ぐべ
 き見込ありまゝ此費額いたゞ登樓費ばかりを勘定せしものよて往復の車
 代や朝飯代の見積らざるあり七番(面白勘兵衛)曰く猶合點の参らざる廉あ
 り再び番外は質す只今番外の誤説明は依り登樓者多きとき金額もまた
 多きゆゑ大籠は遊ぶの意ある歟あんぞ無鐵砲の甚だしきや縦ひ登樓者ガ
 千万人あつても一人の出し金ハ矢張り一圓あり而して大籠の揚代もまた
 一圓はあらや左れば一圓の金を以て一圓の花魁を買はんと欲すれば何
 しても誤廬寐であければ出来ざるあり君これを如何とす番外曰く大籠と
 云つたからとて大籠も種々あり敢て芳原の大籠のみを云ふはあら根
 津は品川に到るところ必き大籠あり而して揚代金もまた其地の習慣によ
 つて相違あるべし請ふ君けつ穴の狭い尻理窟を吐くあかれ若し夫れ費

額すくあければ増加し費額多ければドン／＼減殺する等ハ皆これ戯員の
 協戯もある譯あれ此段とくと誤承知を頼む八番(鼻野下長)曰く本員のこ
 の金額を二種に分つ曰く小格子は遊ぶとき四十錢とし大籠は遊ぶ時
 一圓五十錢を要する是あり抑々小格子の揚代は二十五錢より三十錢よ
 して一人の時ハすこしく不足あれども五人以上あひ集れば五十錢よして
 事足べしまた大籠の如きハ然らば一人の時ハ左程ハ費用を要せざれども
 其人數多きときハ兎もかく藝妓の一人位ハ呼ばざる可からむ其ほか多少
 の無益費えあるを以て僕ハ前中せし費額は爲さんと欲するあり十一番(居
 残番太)曰く八番戯員の説是は似て少しく非あり本員の大籠と小格子
 とを論ぜや單ハ七十錢と爲さんと欲するあり其譯ハ他ハあらや元來われ
 われ貧乏仲間として彼の花魁を買ひ大尽物持と肩を比べんと欲するハ誠
 大間違とすすべし如何とあれ彼ハ彼の其資力があつて之を爲し我々の資
 力なしで之を爲さんと欲す所謂鵠の眞似をする鴉と同様あり矧んやたゞ

纏かよ半年よ一度や一年よ一度ぐらぬ之を施行したからとて何の愉快も
 わらざるべし故又僕の小格子と雖も度々愉快を尽したびく樂みを極め
 んと欲するあり十六番(花肌助平)曰く十一番の説はあはだ宜し僕これを賛
 成す五番(馬井話太)曰く十一番戯員も質す君の如何ある法立を以て之を支
 辨せらるゝ歟十一番曰く僕試みよ之を算せん先づ揚代を二十五錢とし臺
 と酒と相合して三十七錢五厘この内譯の臺一枚が二十五錢酒二本が十二
 錢五厘これよ小物代の七錢五厘を加へて惣計七十錢とあるあり然れども
 是の一人前の計算よして多少の無汰の費もあれども五人あるひの十八相
 合するよ至つての揚代を除の外少しく減額する所あるべし故又其減額あ
 る時これを以て車代および朝めし代および流用する積りあり十五番(財
 布唐之助)曰く十一番を賛成いたす十八番(朝起遅)曰く僕も十一番よ同意な
 り五番(馬井話太)曰く僕も右同斷戯長曰く八番戯員の發戯の賛成者あきゆ
 る消滅す十一番の發戯の十六番十五番および十八番五番等の賛成者ある

を以て戯題とあれり此だん各戯員も報を而して最はや論も尽たり依て之
 を起立よ問べし十一番の賛成者も起立し給へト二三の戯員を除くの外
 物起立あり依て登樓費の七十錢も決す此時下宿屋の下婢來り頬邊を赤く
 して曰く皆さんいせんですよト戯長曰くお三が夕飯を報じ來るを以て餘
 の明日よ譲ると是よ於て一先づ閉怪
 次の日又各々戯事堂よ出づ蓋し前會も續くあり戯長曰く今日も亦誤苦勞
 ながらこの戯案よ就てお饒舌りありたしと乃ち書記をして戯案を朗讀せ
 しむ曰く

第三條

凡そ登樓をあす時豫じめ其地と樓とを定め而してのち施
 行するものどす但し其地と樓との各員の意見も隨ふ

戯長曰く諸君この戯題よ就て討議を請ふ十五番(財布唐之助)曰くこの箇條
 の至極誤迷案の様も存せらるゝゆゑ僕これを賛成す然れども但し書よ於
 て少しく意見あり例へば茲よ三人あり甲の芳原よ遊ばんと云ひ乙の根津

樂まんど云ひ丙の品川へ行んと云ひ名々勝手よその目的を主張し其趣
 きと異するに至つては遂に仲間同士の悶着と起し折角の相談も滅茶苦
 茶となるハ顯微鏡を用いて蚤の頭と見るより明かあり故に僕ハこの各員
 の意見に随ふ云々の文句と剛り「無記名投票」と以て之と定む」と更正せんと
 欲す諸君この説に賛成ありたし廿三番(是輪機体太)曰く本員の十五番戯員
 の修正説と賛成す然れども猶少しく尽さざる所あり如何となれば縦ひ無
 記名の投票と以てするも之と言語に發するも素より同一にして三人が三
 人あら趣きと異する時の矢張メあり依て本員の抽籤を以てこれと
 定むと修正せんと欲す六番(小松田紋太)曰く廿三番と賛成す十四番(苦田卷
 右衛門)曰く僕も六番戯員と同感あり戯長曰く格別異説なきものゝ如し因
 て之と起立し問ふ起立十九名過半数に依て之に決す戯長曰く然らば第四
 條と朗讀せしむべしと乃ち書記として朗讀せしむ曰く

第四條 登樓を爲すとき各々金五錢ツ、と出しまづ蕎麥店に入り

一合飲で然るのち登樓すると定法となす

四番(迂會尾突助)番外と問て曰く登樓するとき何故に蕎麥店に這入て酒と
 飲か其の説明と請ふ番外曰く四番戯員の思ひのほか野暮な人ある哉よ
 そ登樓を爲すときハ微醉機嫌と以て宜しとす然れども料理店や宇治の里
 へ這入りて酒と飲ときハイクラ手輕ししても二三十錢の頭割と要せざる
 と得や且つ又一杯も飲せして直ちハ妓樓に飛込めバ粗酒と飲み籠着と喰
 ひ矧んや馬鹿くしき費用と免かれや故にその体裁と作り且つ費用を省
 けため安直の蕎麥店に入りてコツソリ一杯のみ然る後ハ妓樓に登れば体
 裁もよく又經濟法も適ふ故にこの箇條を設けしありこの段篤と誤承知
 と乞ふ二十一番(左氣香体)曰く原案と賛成す廿四番(附合屁太)曰く本員の甚
 だ不同意あり何とあれバ僕ハ下戸にして常酒と飲せ然る上戸の人も
 同様ハ頭割の勘定と出その所謂椽の下力持て實ハ氣の利ざる話しあ
 り故に本員のこの箇條を削除するか又ハ下戸ハ此限あらせの便し書と

追加せられん事を願ふあり十番(劍呑九郎)曰く本員ハ廿四番の説の但書と追加せると賛成ト廿二番(名佐氣寧)曰く本員も十番戯員と同感あり三番(尾菊雄)曰く僕ハ番外もあ尋ねずと酒と飲ところ何故も蕎麥店も限るか番外曰くナニ敢て蕎麥店も限ると云ふ譯ハ無けれども先づ安直又酒と飲み手輕で腹と肥その蕎麥店の右も出るものなし殊も我々が是までの経験もよるものあり故も蕎麥店と定められども若し他も安直手輕の場所あれば何とぞお指圖と願ふ二番(牟田口勇藏)曰く我れ登樓を爲その成べく冗費ひと廢さるべからず其むだ遣ひを廢するハ何故かと云ハ蓋し二度あそぶ處と三度あそばんと欲さればあり然らばこの蕎麥店も入り云々の如きハ所謂餘計な事と存せられ本員ハ削除説と提出せ戯長曰く格別面白き説もあき者の如し依てこれと起立又問ふ原案賛成の者ハ起立ありたし起立二名少數のため消滅そ次で十番の賛成者ハ起立あるべし四五名を除くのはか總起立過半数より但書を追加するも決そ次で第五條を朗

讀せしむ曰く

第五條 登樓の往復ハ成べく歩行し人力車またハ馬車あども乗べからん是れ蓋し費用を省かんが爲めあり然れども自腹を切り又ハ人の奢りも出る者ハ敢て妨げせ

戯長曰く諸君この箇條も就て發言せられ十九番(借金有藏)曰くこの原案ハ晴雨を論ぜせ車を廢する意ある歟また天氣の時のみ之を廢する意ある歟番外の説明を煩ハそ番外(曾禮茂餘加郎)曰く晴雨と論せせ廢するの見込あり然れども時と場合とより左右ばかりも行ざることあり故も成べくの三字を加へ置しあり十九番曰く然らば原案を賛成す戯長曰く格べく異論あければ應も決をとりべし原案同意の人ハ起立し給へ起立廿名過半数もよつて原案も決そ戯長曰く次で第六條を朗讀せしむ曰く

第六條 戯員中もハ流連を爲そものある時ハこれを噴附次第シドシ押掛て飲倒そべし尤も其費額ハ流連者の負擔たるべし

藏長曰く諸君この筒條の如何廿五番(會禮見高)曰く僕この原案を可とす
何とすれば彼の流連あるもの餘計の金あるとき歟大持の時よあらざれ
ハ出来あし事あり故よこれを嗅つけ次第飲倒すもまゝ飲倒さるゝも流連
者よ於ての素より愚痴と溢と道理なき筈あり是と以て僕ハ原案の飲倒し
と賛成す九番(阿波吹助)曰く本員の武骨者あれハ未だ流連とせし事あり
又大持の事もあし故よ流連の次第知らざれども思ふよこの流連あ
るものハ強ち金ある時と大持の時ハ限らざるべし僕曾て道樂賤生ハ聞あ
り曰く流連ハ種々あり勘定ハ差支へなく鼻毛と伸して之を爲すこれと無
苦奴利の流連と云ひまゝ文久一文あきも敵娼の爲よ留められ勘定の妾
持からイ、じやア有ませんか偶だから今日ハ一日ハ流しなさいヨト促
らされて之を爲すこれを色男の流連と云ひまた金もあき敵娼も促らさ
れ只勘定の出来ざる爲よ據ころあき流連し其中ハ金策を附る事あり之
をツナギ流連と云ふト果して然らば其第一あよび第二の流連の場合ハ於

てハ縦ひ二人や三人が押かけて飲倒すも敢て差支へあかるべしと雖も其
第三の流連者よ對し飲倒すハ誠ハ氣の毒ハ存せ否ハ氣の毒ハ存せざるの
みあらず悪くすると其結局ハ至り多少義捐金を出さねばならぬ事ハ出来
する歟も斗り難きゆゑ僕ハ甚だ之と好まざ故ハ本員の廢棄説を提出す番
外(會禮茂餘加郎)曰く九番戯員ハ問ふ然らば第三流連の場合を除くの外ハ
原案を履行するも妨げあきや將た彼是ハ拘らば原案と廢棄するの誤意見
あるハ九番(阿波吹助)曰く然り第三流連を除くの外ハ素より差支へあしと
雖も我々仲間ハ流連ハ概ね第三の流連にして第一第二の如きハ夢ももこ
れあき薬ハ仕度も之あし故ハ本員の廢棄説ハ至案を廢せんと欲するあり
十九番(何野長軒)曰く九番戯員ハ夢も之あき薬ハ仕度も之あしなど斷
言せられたれども其言草たるや青い眼鏡をかけて人を見るとき一般て自
分ハ不粹だから人も不粹的だらうと想像するハ外あらず是即ち世間見
途の大馬鹿治郎と予さるを得ず何とすれば僕ハ僕の如きハ常ハ流連を爲す

と雖も彼のツナギ流連者等の氣の利ざる譯柄をあらせ即ち道樂子の所謂
 いろ男流連なり依て之を九番戯員と駁し併せて其色男たる事を満場諸君
 と報道す戯長曰く十九番戯員いたゞ自分のおのろけトうぬばれトのみ
 して原案の可否如何及ばせ請ふ速かよ此可否を決せられたし十九番曰
 く只いま申し述たる通り僕ハいろ男あり又流連者あり故よこの原案を据
 るく時ハノマツ又人の爲ハ飲倒さるゝ事ばかりにして僕ハ於てハ甚だ不
 利益あり依て更ハ全案廢棄説を賛成す戯長曰く諸君もはや誤異論をきか
 誤異論なけれバ應よこれを起立よ問ふべし原案賛成の人ハ起立ありたし
 起立六名少數よよつて消滅す又曰く廢案説の人ハ起立あるべし起立十九
 名多數よ因て廢棄説よ決す戯長曰く然らバこれより第七條よ移るべしト
 書記として原案と朗讀せよ曰く

第七條 戯員中よ馬を引て歸るもの有るとき誰彼を問ハせ應接し其
 馬を追ひ拂ふべし而して其馬と拂ひ得たる者ハ相當の賞を與へま

と馬を引歸りたる者ハ至當の罰金を出すべし

戯長曰くこの箇條よ就て討議を乞ふ廿三番(是輪機体太)曰く一寸番外よ問
 ふ相當の賞を與ふとい何等の賞を與へらるゝ乎また至當の罰金とい何程
 ぐらぬの罰金を課せらるゝ見込あるや承知えたと番外曰く賞罰ともよ素
 より立派な事ハ出來がたし故よ先づ馬を引歸りし者より廿五錢か三十錢
 の玉代と出さしめ之を其馬を拂ひ得たる者よ與ふるの見込あり廿三番又
 曰く果して番外の説明の如くあらバ至極名法あり依て原案を賛成す十三
 番(馬尾枚高)曰く本員も原案を賛成す十五番(財布唐之助)曰く僕も格別申し
 分なし即ち廿三番と同感あり戯長曰く然らバ之を起立よ問ふべし原案賛
 成の諸君ハ突立ちとまへ突立つもの廿名餘過半数よつて原案よ決す戯
 長曰く然らバ是より第八條を朗讀せしむべしと書記朗讀す曰く

第八條 戯員中よ若し振るゝ者ある時ハ其揚代を拂ふべからせ尤も
 この場合よ於てハ同行の者よて小集會をひらき而して後よ敵娼ま

たの二階廻しの婆アも掛合こむべし但し時と場合とよりてハ腕
力も訴へ拳固を振舞すも妨げあし

戯長曰くこの筒條も就て討議あるべし十八番(朝起遅)曰く至極面白き原案
あり依て其まゝ賛成す十四番(苦田卷右衛門)曰く本員も原案を賛成す戯長
曰く諸君ハ格べつ異論あきか異論あければ直もこれを起立し問はん原案
賛成の諸君ハ起立われ二三を除くの外ハ總起立よつて原案も決す戯長曰
く登樓手續ハまづ茲も終結せり猶下宿屋制御法および交際費等の條目あ
れども是ハ他日ハ譲り今日ハ先づ是もて閉怪す

○風雅男より縁の君に贈りし玉章の寫し

そやや賤。そやの苧環くり回し。昨日と過て今日と去り。つもの月日を數ふれ
ば。はや一と月のゆめ枕。まくらも響くあかつきの。鐘ハ上野か淺草か。名ハ淺
くさの淺くとも。契りハいと淺からぬ。君ハ別れしその日より。又の逢瀬を
たのしみと。待ハ甲斐あき世のあらひ。月もむら雲はなハ風。かせの心地と打

臥せし。假の病とおもひし。荷めあらで今日までも。枕も伏せる床ちかく。あ
く鈴虫の忍び音。あはれ増穂の篠そよぎ。芽花がそよ風をよぐ。あさぢが
原の秋のそら。ゆくかりがねも言づて。送るハ昨日の夢の跡。ゆび折るもひ
回らせ。過し彌生の花のころ。浮氣な蝶も誘はれて。今宵ハ誰かあづき橋。班
女が闇の睦言。たがひもかはそ枕ばし。嬉しきゆめを結ぶなる。嬉しの森の
下露も。濡て色もそ仇ざくら。櫻もまさる彼の君と。二世も三世もそみだ川。と
も白髪まで白髭の。神も祈誓をこむめ村。かあたこを三圍や。誰を待乳の
はとよぎと。歸るも如きと勸むるも。こころ關屋のそれあらで。竹屋の渡し打
こして。入相告る鐘の音を。おくり迎ひの灯燈も。戀のやみ路も暗からぬ。土手
八丁をはや過て。浮れくるわの仲の町。花ふりかゝる賑ひ。實も極樂淨土か
や。歌舞の菩薩の君たち。花の顔。月。何れを優り劣るとも。定め方なく
氣ハそよる。臍氣ならぬ君がり。今宵ハ宿をかりの妻。もそぶハ鴛鴦の春の
ゆめ。そもや身道。の邊の。やあざの枝の身もしあれば。誰が折とるも儘な

りど。人のいざ云へ。諺よ。袖すり逢も他生の縁と云ふものを。よしや定まる妻
ならせ。假の契りと云は。云へ。過世の縁もあるなんめり。されば暫しの其中
も。忘る。假の浪花津も。生ふれる蘆の束の間も。逢はぬ其夜のつらきもの。思
ひをいと増すか。みくもり勝なる胸のうち。まして一と月あまりをも。逢
瀬たえたるかけ橋を。渡る術さへ。あくおもひ。獨り寐る夜の淋しさも。おん身
の上さへおもひやり。いと。思ひまくれは。どり。あやなく。あつる袖のつゆ。乾
くひまさへ。なら坂や。兒の手柏のその頃も。恃む木蔭も。雨もりて。葉末の露と
消てゆく。親はなれし雛鳥の。翼も。散れし悲しさを。他所見て。すぐ神々を。
怨めせせんも。汀ごと。梶を絶たる。捨小舟。よるべ泣く。歲月を。送りて。漸く人
となり。まとも。苦海も。身を沈め。馴し故郷ふり捨て。友兄弟も。生わかれ。ふた
びいつか。大坂や。神戸の浦を。舟出して。西も。ひがしも。白波の。そら恐ろしき海
を。こえ。遠き。あづまの雲のはて。名へよし。原と聞かれど。かなしき事の。仲の
町。うきふし。繁き川竹の。あぐれの末も。とみ町や。あくく。月日を。ふる里の。た

よりを。昨日京町や。出づる事さへ。まよならぬ。籠の中。あるきりくす。あく音
を。誰か憐ぞと。あぐさむ。人の絶て。あき。泣の涙。ふし見町。夜毎。かかはる。客人
も。わらひ顔する。苦しみ。泣も。まさる。うき思ひ。おもひ遣。だま。みだ川。水
の。あぐれ。人の身。は。かあき。ものと。嘆たる。病ひの床。又筆とりて。書つ
りたる。言の葉。未だ。つきざれ。如何せん。紙も。かざりの。あり。文を。つくさ
ぬ。事。又の日。おしき。筆を。ぞ。こ。よ。と。めぬ。

○客齋坊先生の傳

客齋坊先生。愆張國の人。として。父を。化痴助と云ひ。母を。客と云ふ。先生の
其息子。あり。是より。先き。母のお。客。子供の。生る。を。憂ひ。曾て。石地藏尊。を。祈て
曰く。妾の子。供の。生る。を。恐る。こと。茲。年。あり。而して。幸ひ。子。あり。故。よ
夫婦。ども。安堵。致し。居れり。然れども。人間。人を。造る。器械。あれば。何時。又。餓
鬼の。生る。も。計り。難し。因て。子供の。生れ。ざる。前。取。こし。苦勞。して。石地藏尊
を。願ひ。あ。く。あり。南無。石地藏尊。さま。我々。夫婦。の中。子。の。生れ。ぬ。様。あ

願ひ申したし妙法石地藏尊さま〜何卒子供の出来ぬ様も守り下され
 度もしまた止を得ざる譯柄あつて餓鬼をお授け下さらば尊体の様も飯も
 喰ひ着物も着かい餓鬼をお授け願ひ奉ると合掌祈願すること七日七夜を
 りしよ終ふ其功驗なく一夜盜賊まのび入り臍くり金を奪ひ取るよと夢見
 て乃ち孕めるあり月満期又至つてオギア〜の聲を發す化痴助の餘計を
 物の飛出せしを憂ひお客の厄介者の出来しを悲むと雖もマサカ捨り殺す
 譯よも行せ濫々として仕方なく養育す是れ即ち吝嗇坊先生あり先生幼名
 を慈助と云ひし其後又貪平と改たむ先生の性質はあはだ吝嗇よして父
 母の強慾よ劣らや蓋し血筋を稟しあるべし先生幼少のとき一寸よも金を
 拾ふ真似を爲し瓦や石を抱て金貨よ擬し木葉を取て紙幣と爲す一日人あ
 りて戯むれよ其瓦石木葉を奪ふ先生大ぬよ怒つて肝癪を起し箆を取て其
 人よ擲つ蓋し箆の輕柔の器物あれバ幾たび擲つとも破損の氣遣ひあけれ
 巴あり是よ於て人々その吝嗇の人並あらぬを知り其名を呼ばせして吝嗇

坊と云ふ生長するよ及んで益々吝嗇よして人情を知らず義理を顧みせた
 だ錢を溜るのみをこれ事とす棄る物の爪の垢も之を嫌ひ出す物の鼻糞も
 之を厭ひ身よ衣服を着せ足よ履物を穿せ冬さむけれバ鍛冶屋の軒よゆき
 夏あつけれバ氷屋の傍らよ立ち蒲焼の香ひを嗅で旨しとし酒樽の形を見
 て酔りとし人烟草を吸バ其けむりを握で之を吸ひ人團子を喰へバ其申を
 拾つて之を嘗む凡そ身を勞し手足を動して用の足る事あらバ恥も外聞も
 思ひ成べく口ハを以て之を爲す而して居る處わづかよ二疊敷よて疊建
 具より桶茶碗の類よ至るまで一ツとして満足の物なく戸棚の腐れて鼠ハ
 暴れ次第天井ハ破れて雨もり放題目の前よ草生じ耳の邊よ虫あく然れど
 も先生ハ平氣の平左よて錢を惜んで修繕を加へせ故よ向ふ三軒兩隣みあ
 鼻を撮んで逃て交際する者ハ更よあく又これを憐む者あし然るところ命
 なる哉一夜泥坊まのび入りて彼の命と釣合の溜錢を奪ひ去りビツ錢半欠
 をも殘さや是よ於て先生大ぬよ仰天し膽を潰し目を回し遂よ始終苦年を

一期として自ら錢箱を潜り込で死すと云ふ噫

○盆梅狂話

居士の疝癢短氣を加へ

隱居の辨護理屈を陳ぶ

居士の性梅花を愛す故に年々歳々はな開き香を放つの時も當つてや遠き
の之と杉田蒲田と尋ね近き之と龜井戸向島と訪ひ以て賞愛を其の賞愛
する所以の者の花が奇麗で美人の様だとす故に又詩歌風流の材
料と得んが爲も非せと傲霜凌雪の耐堪力ありて大丈夫の氣性と帯と
以てあり然れども之と杉田蒲田と尋ねるの其路遠くして餘計な散財と爲
さる可からせ之と龜井戸向島と訪へば其路ちかしと雖も歸途また北方
又飛の憂ひあり是と以て今年に道樂法と改正し其費用を減殺せんと欲し
其工風を一友人と相談を友人曰く費用を省きなほ十八並の樂しみを爲さ
んと思ひ之を縁日と買ひ目の前と置け如せ之を目の前と置けけ拳固然
たる蓄の時より大笑乎たる満開に至るまで氣儘に愛賞するを得べしと居

士これを聞き其名法と感服し早速走つて水天宮の縁日に行き其枝の大人
國の鼻毛の如く其蓄の小人嶋の拳固の如きもの一株を買て歸り歸宅早々
これを半缺の土瓶と栽て座右と置く即ち昨年十二月水天宮の縁日兼歳の
市の時あり爾來その花の開くを待こと恰も情婦の戀男を待と如く書生さ
んの學資金を待と如く毎日欠伸をあらば花開き香ひを發するを待と
雖も絶て其甲斐なく一週間を過ぎて蓄の矢張り小人嶋の拳固の如く未だ
曾て大笑ひ乎たる花を開かぬ一月己も過ぎ杉田かま田龜井戸向島の噂を
諸新聞に見るに至るも土瓶の梅の相替らせ依然として一笑をも催ふさせ
是に於てか居士疝癢を起して曰くこの腐り梅的が人を馬鹿とするも法圖
の有つた者あり何ぞ花の開くの遅きや汝が此の新聞を見よ杉田でも蒲田
でも其外どこでも彼處でも皆己も爛漫として香ひを發せと云ふ天然生育
の梅樹として猶此のどし然るは汝が暖かある室の中も生育し居士の
膝下も居りあがら書と梅も同じ事にて初めより少しも替る事なく未

だ曾て半笑の様子も見せざる何事ぞや元來梅の花と云ふ者ハ外の花よ
 先だつて開くは天然の規則あり故に古人ハ梅花を稱して寒英と云ひ花魁
 と云ひ春信と云ひ新香と云ふ皆その早きを謂ふは非や之は因てこれと
 観れば汝ハ天然の規則も背く即ち天地間の罪木のみ贅物のみ居れ我造物
 主ハ代つて此罪木贅物を罰して呉んとこれと臺所ハ放り出し將ハ出齒庵
 刀と以て之と切倒さんとす時ハ隣家の隠居親父入り來り之と止めて曰く
 先生(何の先生だか)も短氣ある哉たん氣ハ損木あり先づ暫らく中止せよ我
 請ふこの梅樹の爲ハ辨護せん抑々この梅樹や初め暖室の中ハ生育しホ
 ッ／＼蓄と發し暖ハ乗じて將ハ開かんとする頃俄かハ非常の寒風ハ晒さ
 れ剩さへ先生の座右ハ侍と雖も根ハ一滴の水も飲さず枝ハ一刻の日
 をも見せず恰も陰乾と同様の取扱かひよして之を責るハ名所の花を以て
 し之を詰メ梅屋敷の例を以て何ぞ無理無体あるや試み思へいくら利
 功の小兒も教へ無ければ馬鹿とあり如何ある名刀も磨ざれば樺木杓子よ

劣り綾羅錦繡も縫はざれば身ハ纏ふ可からず紫檀黒檀も削らざれば材ハ
 用ゆべからず耕耘力を尽さずれハ肥田も瘦地とあり藥餌その法を用ゆざ
 れハ病人も全癒に至らず大佛を負て相撲取も食はざれば餓鬼の如く瘦小
 町を欺むく美婦的も化粧せざれば幽靈の姿と爲り佛國出來の金皮時計も
 卷ざれば時を報ぜず英國製のゴム靴も磨ざれば艶を生ぜず是ハ自然の
 定則あり豈またハ梅樹のみ責べけんや若し夫れこの美花を見この清香を
 嗅んと欲せば先生あんぞ此ハ培ハざる何ぞ此ハ水を與へざる先生これハ
 水も遣やこれハ培ハせ而して美花を見また清香と嗅んと欲す所謂教育を
 施さずして馬鹿とあるを責め耕耘を爲せして瘦地と爲るを責ると何ぞ異
 ちらんや是れ此梅樹を責るハ甚だ無理無体とす所以あり先生以て如何
 と爲すと居士この長鱸しき小理屈を聞き欠伸交りの挨拶して曰くナ、
 ナール程

○某氏の子よ名くる説

夫れこの世界中にて第一必要ある者何たらうとやせば飴賣親父の尻
 は附き纏ふ鼻たれ小僧でも金だ第一だと答ふべし然り金の國家の寶
 り世界の調法物あり喜怒哀樂も金より生じ盛衰榮枯も金より來る若し夫
 れ金なければ何因て快樂を極め何因て贅澤を爲し何よつて飯を喰
 ひ何よつて酒をのみ何よ因て權妻をかへ何よ因て女郎を買ひ何因
 て家屋に住し何よつて衣物を着ん乎衣食住みも金力より面白をか
 く暮すも金力よ因る凡そ何事拘らぬ何物を論ぜざ己れの思ふ事を爲さ
 んと欲すれば皆金力よ因らざれば能はざるあり金さへ有ればドウヅヤ一
 文の乞食も立派な旦那樣と爲つて小町揚貴妃の如き別嬪をも氣儘よし無
 學文育の大馬鹿と雖も利功ものと視られて人々よ尊敬せられ三平二満山
 出しのお三と雖も黒塗常紋つきの人力車に乗て奥樣糞をくらへの様子を
 極込む事を得ればアあまゑべいの瓢床權助と雖も別製の馬車は鞭ッて
 紳士の体裁を氣取を得まゝ金なければ立派な旦那樣と雖もドウヅヤ一文

の乞食とあり大學朱熹章句の大先生と雖も大馬鹿と視られて人々よ嘲笑
 せられ立派な與樣と雖も奉公口を尋ねて桂庵の手まかり銀行の若旦那
 と雖も天秤棒を肩よして大根牛房を賣よ至るべし嗚呼金の有ると無きと
 は亦たい層を相違あらや故マンと寶藏忍び入り寶ものと奪ふ
 者ハ百兩の褒美と欲すればあり亡君石碑料の爲よ輕が女郎と爲りしハ
 五十兩の金よ困ればなり與市兵衛の横腹と貫かるゝハ五十兩の金と渡さ
 ざるが爲ありおとはハ百兩のため身と賣て稻川と助け忠兵衛ハ遣ひ果し
 て僅かよ二分の金と残り師直ハ金の爲よ低頭平身して若狭之助ハ詫る等
 一々枚舉よ追あらやと雖も要するよ金ハ調法物よして此金あれば贅澤と
 きめ込み無上の快樂と求め勝手放題氣隨氣まゝ思ひ存分の目的と果し得
 べきあり是を以て此子と金助と名く金助よハ生長の後ハ能く稼ぎ能く
 働き而して富士の山の如く金を積依頼心と起させ乞食根性を出させ國益
 を計り濫出を防ぎ紀文大尽をして地下よ歡息せしめよト書して以て名字

の説と爲し併せて金助も與ふ

○氣樂堂の記

怒髪天と衝て勢ひ猛虎とあざむき動もそれバ腕力と恃んと欲するも似たるものハ劍呑山あり破れ蒲團あたまを出し恰も生酔の如く動もすれバ勝惚と踊らんと欲するも似たるものハ寐轉び山あり兩山の間四時の殺風景たづねせして自在万事の面白味もどめせして又そあはる前ハ二川あり一を儘の川と云ひ一と嘘の川と云ふ此川や甚だ大あらぞと雖も聊か命の洗濯すべし後ろハ一樹あり迂奴の大木と名くこの樹や矢鱈ハ枝葉と張と雖も別段ハその功能あしたハ益槍屹立のみ實ハ奇々妙々の土地と謂ふべしこの頃僕の友人腰拔道人ある者さん玉を質ハおき犢鼻褌と賣り拂ひて一堂とこの寐轉び山と儘の川との間ハ經營す蓋し生涯を氣樂ハ送んと欲するあり道人一日はダきを以て報じて曰く予ダ草堂やうやく其功を奏するも因て聊か濁酒一合と買ひ以て祝意を表せんと欲す君もし閑暇あらバ今

日午後三時より來ッて麴酒一杯を喫せよト居士この案内を得るや忽ち喰ひ倒し飲休しの了簡と惹起し下駄と草履とを片跛ハ穿て其筵ハのぞむ筵ハ臨めハ平生仲よしの友人何尾勇藏飛田琴太是輪妙太成程餘勘平仕方梨藏堅井石之助おどの諸氏みな己ハ在り居士も亦その尻尾ハ座し杯を抱る酒ハ濁酒なれども飲バ則ち酔ハ肴ハ粗末あれども喰バ則ち旨し况んや祝酒ハハハなり頭割を喰ふ氣遣ハあきハ於てをや一杯ハ又一杯ハのハ圖歩七の酔を尽すハ及んで起て踊るものあり座して謠ふものあり月落を吟むる者あり藤八を遣かす者あり悪口を叩く者あり居睡りを爲す者あり踊る姿ハ案山子の如く謠ふ聲ハ破鍋を叩くハ似たり喧々囂々氣ちダ病院と一般あり時ハ腰拔道人居士の袖を牽て曰く僕こハ此堂を造り命の洗濯所と爲す建築ハ心よかあハ風景ハ意ハ適す唯憾むこれダ堂名あきを君幸ひハ佳き名前を撰定せよト是ハ於て居士首を傾げ熟考すること凡そ一時三十分ばかり乃ち氣樂の二字を書して道人ハ與へ且つ告て曰く道人

試みよ思へ現時商法も勉強するもの不景氣と悲まざるなく農事も骨折
る者の米の下落を嘆ぜざる者あし娼妓のお茶を挽き藝妓の罰金を喰ふ等
いろく様々の混雑一ツとして心配せざる者あし獨り道人の然らば縦ひ
一文の小遣ひ錢なく一枚の着替よ乏しと雖も晝の儘の川と寐轉び山の間
に逍遙し夜の都々一トツチリトンを謠ひ寐も自由あり起るも自由あり實
に氣樂と謂ッ可きのみ是を以て此堂に名け併せて記と爲す

○吉原の不景氣を詠ぎ

嗚呼不景氣よ不景氣よ
客人次第に減りゆきて
くるわの丸で暗同やう
はした女郎が巾さかせ
絶る間のあきいろ騒ぎ
むかしの姿の更にあく
お前が入りしその後
軒ちやうちんも光あく
安からざれば買人あく
入りこむ客なくまや入
品格まだいに下落して
冬の來れども錢出來ぬ

移り更りの當てにした
湯水のごとく錢かねと
何れの時にあるやらん
嗚呼吉原とすくはんと
數十まんの大さんと
揚屋町と見わたせば
くものきわまで屹立し
勇と振って切って出で
取ひしぎたる腕まへに
仲の町ある茶屋くも
客ひく爲めの燈籠も
にわか仕組も彼是ど
つらく思ひ廻らせば

客人たちねとづれを
遣ひ捨つる馬鹿もの
待遠しさのいたりあり
家とつおして奮發し
ぶち散者ならざるか
まを川樓の峨々として
寂れし花街の其中より
頑固社會のきも玉と
實に感心のいとりなり
この不景氣よ大困り
思ひし様よ味入あく
故障のみよて引たさ
世よ不都合のこの家業

そる盤だまよ合せして
古來娼妓とけい城と
國をうしなふ者もあり
身とあやまるの此道ぞ
成べく事あら廢すべし

つぶれた方が増あるぞ
よぶ譬へさへある如く
若もの達も中途よて
國の爲めまゝ人のため
成べく事あら廢すべし

○誤間可詩の序

鴉の黒し鶯の白し鴉の黒きと見て黒しと云ふ是れ尋常の言のみ鶯の白き
と以て白しと云ふ是れ當然の語のみ此尋常の言と吐きこの當然の語と云
ふ誰か奇とあし妙と爲さんや然れども鴉もし雪の中と潜れば黒たちまち
白も化て随分面白味あり鶯もし墨壺も落れば白たちまち黒も變じて餘ほ
ど面白味あり扱この面白味あり面白味ある場合もわたって月落烏啼流儀
の屁痴堅き正則を以て小理屈を並べ立るも決して面白からざるあり是
於てか古人狂詩ある者を考へ出し彼の雪の中を潜る鴉を以て鶯と云ひ傲

し墨壺も落たる鶯を以て鴉と云ひ傲し奇語妙言と臍をしてお茶を沸さし
め頭痛として足の先も轉居せしむ道脈。半可。穆念。蜀山。等その人あり蓋し狂
詩の日本人の獨専すあはち日本人の寐言として柔を以て剛を制し世を諷
し人と諫る至極結構千万の道具あり然れども今を距る廿年以前金もん先
箱葵の麻上下の頃の人々多くは屁痴固きを第一となし外も出れば左様然
らばを以て挨拶し内も入れば大學朱熹章句を迂鳴の故も間々滑稽氣樂人
あるも滅多を寐言を吐けば牢屋も叩きこまれ鬚端を打切らるゝの故を
以て世を諷し人を諫めさくも藪をつゝいて蛇を出すを恐れ復た狂詩を迂
鳴る人なく柔を以て剛と制する結構千万の道具も一時不振の有様も属せ
り然るも文明開化の今日とあり如何ある寢言と吐くも差支へなく人みあ
澁面もして暮さんよりハ笑って日を送るも如ざると知り猫も杓子も狂詩
作り吉公も熊的も狂詩と作り何も狂詩蚊も狂詩と狂詩と迂鳴て日と暮
すも至りし何より結構千万よて居士も兩袒とぬぎ兩手とあげ日本橋の

真中又突立て大賛成つかまつるあり去りあぐら平仄韻字もあ構ひなく唯
 二十八字洒落文句と並べ或ひハ蟻の梨子と集り無暗矢鱈と假名とつけ假
 名と取り去らば一字も讀む事ハ出來ぬと雖もこれハ拙者の狂詩ありト獅
 鼻とろごかし道脈半可その人ハ氣取ものあり此の如き滅茶苦茶の狂詩
 至ッてハイクラ名作でも居士ハ兩袒と入れ兩手と下て日本橋の横ッ佇
 打倒れて賛成つかまつらざるあり古人曰く物あれハ必そ則ありト凡そ天
 地間の万物大となく小となく事々物々一として規則あらざる者あり故
 其規則ハ從つて其事と取扱かふ素より至當あり其規則ハ背いて之と取扱
 ふハ眞の取扱ひもあらせ所謂胡麻化子あり友人幻夢居士つねハ狂詩と好
 みあ三居睡りと爲すも直之と狂詩と作り山の神ふくれ面と爲すも直
 之と狂詩と作り榎木棚より落るもこれと狂詩と作り鼠戸棚より飛出
 すも之と狂詩と作り何も狂詩蚊も狂詩と小兒と教るも狂詩々々アワ、と
 云ふも至る然り而して其狂詩たるや柔と雖も剛と含み弱もして強と兼ね

滑稽縦横一讀百笑人として臍ハ茶と沸し頭痛と足も下し能く讀み能く笑
 ひ然る後ハ其諷意あると知らしむ而して平仄必らず履ハ韻字かからせ押
 し規則確然として決して胡麻化子の類もあらせ幻夢子この頃その平生作
 る所の狂詩と集めて一冊と爲し名けて誤問可詩と云ふ一日これと携へ來
 ヲて序と僕ハ頼む僕曰く誤問可詩ハ胡麻化子の謂ひある歟それ胡麻化子
 ハ其實あくして世人と瞞着するの言あり此詩その實あつて其實あきの名
 前と附て是れ遠慮の心持ハ出ると雖も亦あらず卑屈の甚だしきや宜しく
 狂詩集と改題すべきありと居士曰く然らず君たど此詩と實ありと爲そ
 も天地ハ大あり世界ハ廣し若し道脈半可其人の如き先生あつて之と見れ
 ば即ちこれ胡麻化子と爲さんのみ其嘲笑と招ひて後これと悔るも致し方
 なきもあらや夫れ之と思ハせして唯我獨尊と極込む者まゝ之あり予ハ
 この唯我獨尊の流儀ハ與せざるありト其言一應理あり因て其請ひと諾
 せ然れども僕も亦胡麻化子と貧乏ひま無きと以て窃かハ胡麻化子の念

と發し一狂詩と賦して之に贈り其實と懸んとす居士承知せせして曰く予
の狂詩と依頼せしむらば序文と依頼せしあり然るに僅か一詩と以て
これと胡麻化さんどと恰も鰻の蒲焼と誂へて鱒鍋來ると一般人と馬鹿と
するも亦甚だしからやとグツ／＼小言と並べ且つ責て止せ因て己むと
得せ之と記し以て序と爲す然れども矢張鱒鍋の目算違ひと胡麻化子の流
儀とを死れざるあり

○娼妓の年齢を限る可き説

或人問ふて曰く昔しの娼妓と今の世の娼妓と以て異なる有りや居士答へ
て曰く以て異なるあり昔しの娼妓の之を分て三種と爲せ曰く花魁曰く女
郎曰く飯盛これあり何又因てこれを區別するかと云はゞ綾羅錦繡これを
身纏ひ珍味佳肴これを口喰ひ侍するは妓婢あり口舌を勞せせして万
用足り使ふ了了髪わり手足を動かさせして諸事辨せ而して動作慎沈容姿
麗艶恰もお姫様の如く富人豪客にあらざれば應せせ風流浪子にあらざれ

ば接せざる者これを花魁と爲す即ち芳原娼妓の首魁あり衣裳美からせ
具麗しむらば綿布寒を凌ぎ蔬餐餓を忍び其人の善惡を問ひ其容の貧富
を論ぜせ來る者これを笑迎し接するもの之は夫事すこれを女郎と爲す即
ち芳原その他娼妓の下等あり品川玄ん宿板むし等の娼妓これを飯盛と爲
せ而して綿衣蔬餐寒を凌ぎ餓を忍ぶに敢て芳原その外の女郎に異ならせ
と雖も幕府の役人この驛路に泊る毎にこの娼妓を出して飯の給仕せし
む故に此名ありと云ふ今世の娼妓然らば上は大雛の別嬪より下は小格
子の醜婦に至るまで總て娼妓と稱す其名稱すでも異あり隨つて業務中も
亦異なる所をからざる可からせ其異なる所の者何ぞや曰く昔しの娼妓
の苛酷の責は苦しき今今の娼妓は自由の權あり苛酷の責を受ると自由の權
あると其差ひに雲泥をあらざるは非や夫れ然り今世の娼妓すでも自由
の權あり自由の權あらば何ぞ速かに牛馬の賤業を脱して正業に基かざる
や況んや今世と雖も昔しの遺風を存するに於てとや居士妓樓に遊ぶ

毎に未だ曾て潜然たらせんばあらざるあり何とされば娼妓の業の元破廉の賤營にして縦ひ綾羅と身に纏ひ佳肴と口に喰ひ妓婢あり了鬢と使ふも我生家に居て自ら薪炊の勞ととり自ら箒と提て豆腐と買の自由にならざるあり然り而して娼妓その自由と知らざる歎これと知らざるに非せと雖も皆これ止むと得ざるの情状あつて苦と忍び難と凌ぐもの歎試みに思へ芳原幾千の娼妓中みづから好んで之と爲そ者蓋し万中の一のみ今他の娼妓に就て一々これと質さば必せや悲々泣々將に答へて云んとその妾父母の窮迫と補はんが爲あり妾の兄弟の負債を救はんが爲あり妾の某々の欺く所とあるあり妾の繼母の憎む所とあるあり或の何あるひ何と其不幸薄命ある寧ろ之に過る者あらんや嗚呼娼妓の情状の實は憐むべき者あるか他人己に此情状を憐み而して自ら之を省みざるの何故ぞや説を爲そ者あり曰く朱に交はれば赤く爲るありと居士以爲らく然らば娼妓これを省みざるに非せと雖も如何せん莫大の負債あり而して其補ふ所の

一年わづかに十分の一に出せ其殘餘の九分にまた利子と臨時費とを増加するを以て今年補ふ所も明年また舊に復す恰も滿潮に向つて海水を汲取ると一般にして縦ひ幾十年を経るも悉く其負債を償ふに由なきを以て所謂三十振袖四十島田の者各樓に就て指を屈せし是れ居士の可哀想と爲そ所以にして又この稿を起す所以あり然り而して之を救ひ正業に基かしむるの策は如何して可ある乎曰く廿五歳乃至三十歳を限つて廢業せしむるに如ざるあり今もし廿五歳乃至三十歳を限つて廢業せしむれば一旦の賤業も之を雪ぐの時あり一時の破廉もこれを補ふの期あるべし不幸薄命を救ふの策これ措て豈に他あらんや斯く説き來らば樓主あるひ云はん年齢滿て廢業のとき猶負債ある者の樓主あれを抛つ可き乎一娼妓廢業する毎に其餘債を棄れば幾個の金庫あるとも徒らに娼妓の爲めに消滅せんと其言尤も然り然れども初めより其年限中に償ひ得ると否とを豫定し其償ひ得べき金額を貸與すれば何ぞ樓主の損失あらんや樓主損失なく娼妓

も亦正業に基くを得ば是れこれを一舉兩全の良策と謂ふも可あり故に曰く娼妓の年齢を限るに如きと

○某細君より代りて外宅の妾より與ふる書

鼻野下長右衛門の妻お何のつとみく頓首再拜失敬を願せを突然おら大極上々吉すこぶる別嬪のお膝下に一筆まめし上り向寒の時節にて菊花己に萎み水仙將に開かんとする折柄お前様事毎もは替りなふ立派にお化粧して羨暮し成され由何より結構舞雀躍に堪ざるあり扱此度出しぬけに此書を呈せば貴嬢かあらせ嗤つて之を放り出し且つ將に云んとす山の神角を生じ旨くもあい焼餅を焼と尤もある哉その嘲りや妾がこの嘲りを受け此笑ひを蒙るの百も承知二百も合點あり妾の少し扱作あれども聊か恥と外聞をを知る何ぞ清姫も傲つて角を生じ安珍を日高川よ逐掛るの野暮を爲さんや女大學より曰く女房として焼餅を焼ものゝ去るべしと妾の元家附の娘おれバイクラ焼餅と焼ども去らるゝ氣遣ひ無しと雖

も焼餅の女の憤むべき所おれバ何ぞ焼餅を焼て赤恥を世間へ晒すを欲せんや妾が此度この文を出すに決して焼餅主義をあらせ少しくは相談あつて而已請ふ是よりソロソロ説き來るを待て而して後又嘲笑を加へよ屈指すれば當春の三月ごろ某宴會の事ありて妾が旦那もまた其招待に應ずるの夜旦那の家へ歸らるゝ頗る遅く殆んど午前三時より妾の餘り遅きを怪しみ故を問ふ旦那曰く今夜の殊の外に酔ッ拂ひ苦しきま堪ざるより待合茶屋に一睡し此深更及びべりと誠に眞面目らしきゆゑ妾これ信じ敢て其委しき事を問ひざりし其後又一週間程を経てまゝ右同様の事あり妾以爲らく是れまゝ交際上止むを得ざるま出る歟と然るゝ爾來日を経るゝ随つて其數多きを加へ曩日の一週間より一回位の處で此節で一週間より三回より至り随つて其費額も亦前日より十倍するを覺ゆ然れども未だ何故あるを知らず其故を知らせして滅多に口を出さば或ひは劍突を喰ひ拳固と頂戴するも斗り難きと恐れ下婢お鍋も命じてコツソリ其仔細と探偵せし

めしよ此頃鍋その原因と探り来り告るよ貴嬢と外宅よ置と以てせり思
 よ於て平ナル程と悟り漸く手掛りと得て妾の欣喜果して如何ぞや夫れ
 男子の別嬪と外宅よ置き或ひに待合船宿よ誘ふに因より男子の働きのみ
 妾あんど焼餅と焼て猥々騒ぎ立んや唯如何せん費額多きと加へ收支相償
 はせ又主人が怠慢あれバ召使ひの者まで皆命と奉ぜせ一家の混乱何と以
 て取締るべけんや妾かつて聞曠ることあり家よ女房あるに猶國よ宰相あ
 るが如し家内と司ざるに女房の役目よして國內と治むるに宰相の責任あ
 りと然らバ則ち一家の妻たるもの收支の相償の産家の傾耗よ属すると
 傍觀すべけんや是れ即ち今回相談と爲すの大極柱あり諺よ云ふ人増せ
 バ水増そと矧んや一家増せば費額もまゝ増す素より其道理のみ又况んや
 意氣を格子造りよ住み小意氣ある三と遣ひ日々旨い肴と喰ひ夜々爪弾よ
 樂むよ於てとや因て妾の思ふよに我家の狭きよ非や造作の少々不粹か
 知らぬどもまゝと以て膝と容れ心と養ふ座敷をさよあらせ故よ貴嬢も我家

よ同居せば第一よ經濟の上都合を得第二よ家事向の取締りに宜しく第三
 妾も片腕の力を添て莫太の便利と得第四貴嬢も日向の身とありて意外の
 氣樂あり是豈よ一舉万全の策よあらせや斯く説來らバ貴嬢よ將よ云の
 んどを馬鹿を事をすず者かあ正と權との其權利のづから異にして恰も
 地主と店子の如しア、嫌だ〜我の日向の身と爲り馬鹿〜しき窮屈の
 思ひを爲さんより寧ろ外宅よ居て爪弾の氣樂を食るよ加せと夫れ然り豈
 よ其れ然らんや妾のこの策を考へ出すに其意親睦を旨とし經濟を計り共
 よ俱よ力を合せお前百まで我や九十九まで共よ白髮の生るまで仲宜く暮
 すよ在り冀くの貴嬢も妾が心の切あるを推察し妾がこの計畫を賛成せば
 妾よ妾の幸福のみならず又旦那様の大仕合せあり猶ふでを擱に及んで一
 言附白する事あり妾より之を旦那に申し上れば譯あしこの懇々痴機に似た
 れども妾の口より此の如き事を吐き出さバ却て火事場よ火を振舞その疑
 惑を蒙るも亦知るべからせ故よ貴嬢より寐物語り鼻毛を算るの序で老練

の手管と流水の辨舌とを以て盲く持掛れば存しの通りの旦那ゆゑ一も二も亦く好結果を奏するや必せり此事の成と成ざるとの總て貴懐の舌一枚あり何卒よろしき様御取斗らひの段仰望も堪ざるあり頓首々々目出度し

出過居士曰く細君の理屈至極よろしきが如しと雖も亦我が田水を引の手前勝手なきや非や且つ素人と粧賣人との其了簡もとより異あれバ細君の相談相手は爲らざるの照魔鏡も照して見るより明かり何とあれバ彼れ外宅に居れば遊び放題放題お負も芝居の替り目毎よこれを觀旨い物の喰たい時にこれを喰ひ一ツも氣苦勞の事あり然るも細君の仰せは隨ひ細君の傍近くに行は是等の專遊權を棒に振刺さへ餘計な心配あり誰かこの氣樂の專遊權を棄て窮屈の境界に潜り込むの用心あらんや細君定めてお困りと雖も畢竟の細君の氣の利ざるに原因す故に今更よんどころ無き次第あれども男心の秋の

空の如く變り易き事もあれバ今日大あつゝあるも復た應に寒冷を來その時あるべし試みに見られよ何も西洋是も西洋と一から十まで西洋々々と西洋に醉拂ひし先生達も近來は少しく目を覺し稍舊を慕ふの念を發せしに非やや細君よく肝癢を起させ熱の醒るを待て策を施そに如ざるあり阿々

明治二十年五月廿七日版權免許
同年九月出版

正價金五拾錢

東京府平民
千葉茂三郎
京橋區銀坐二丁目六番地

發兌所
京橋區銀坐二丁目六番地
共隆社

稗史小説出版書目

三木愛花仙史戯著

○百鬼夜行 社會假粧舞 洋裝美本全一册 正價金五拾錢

此書の某貴顯の夜會は千怪百鬼が集まり各古今東西の聖賢名士英雄美人を假粧して舞踏を催せる處を筆頭の照魔鏡にて一々其假粧を看破し凡そ宰相の怪○書畫家の怪○貴嬢公子の怪○醫士の怪○軍人の怪○僧侶の怪○小説作者の怪○經濟家の怪○改良演劇の怪○隱者の怪○花魁の怪○儒者の怪○道士の怪○詩人文章家の怪等あらゆる妖怪の正体を見顯とし直筆毫も忌諱せず眞は鬼神を泣かえむべき古今未曾有の珍奇ある小説あり

○照代東京の新年 洋裝繪入美本全壹册 正價金三拾錢

東京の日本の首都なり新年の景色亦た一層の美觀を呈し萬民各照代を樂み悠然たる和氣の全府に溢れ自から太平の現象あり之れを一括せる此書にして上品の趣向平易の文字新奇嗜好を穿ち滑稽頤を解き貴賤讀むべく老幼見るべし其何人あるを問はず一同緇かバ忽ちお目出たしの聲を發せざるを得ず

瘦々亭骨皮道人演説 和良井鋤太筆記

○拍手滑稽獨演説

洋裝美本全壹冊 (版權免許) 正價金五拾錢

演目次○金の有と無との孰れか宜平○天麩羅の説○日當の説○道樂の説○油斷の説○奪はるゝ説○酒の利害を論ず○儘ふならぬ浮世○月と籠との説○競争の説○細君に一言す○益裁の改良を望む○詰りどらする平○狹帯會○丁稚小僧に忠告す○娼妓に現を扱すの野暮なり○鶏と孔雀とは孰れか優る○雪中の感○自負の説○居い先生又望む處あり○似て非なるものゝ説○事の輕忽に處すべからず○日用の往復文の簡短よして解し易きを要す○十把一からげ○馬鹿か利功か○情死の廢止にすべし○注意の平均にお頼と申す○占の頓智なる説○歳晚の説○恐るべき説○重言競べ言葉のわけ足

○世に獨り相撲と云ふものありて。獨で敵と味方を兼ね。自分免許の大關氣取。四十八手の裏表貫抜かわす脊負あげて。八化ヨイヤの行司なく。何方が負ても我獨り。轉々々々笑ひせる。滑稽踊の土俵より。土俵圖もあい法螺ふきを。思ひ出せし演説の。始終發戲の新工夫。口から出まかせ芽茶苦茶に。味噌と糞とを混淆て。瓢箪鯨の戲浮戯体。腹をるぐりしお饒舌の。贊成ある歎不同意歎。底の如何か知れぬども。笑ふ門に福來る。笑て損した者ない。泣て澁々暮すより。笑つて暮すが命の洗濯されば獨りで苦世々々と物案じする窮屈を。儘の川へとツン流し。オヤ面白ム子へ。オヤ可笑い子へと。諸君よ。御覽あれ

三木愛花仙史閱 中村柳塙纂譯

○自由華盛頓勳功記

洋裝美本密書入 全一冊正價金六拾五錢 (版權免許)

米國の獨立戰爭の世界未曾有の事なり然れども譯本皆正史跡なれば其事實却て傳へらず此書ハコロンブスが亞米利加發見の話歐洲各國より殖民の次第に始り七年間七十餘度の獨立戰爭に華盛頓將軍が一代の譽を顯しす實傳を演義稗史跡に綴りたる勇壯流暢の軍記にて我邦に於て西洋正史を演義と譯したるの鼻祖なれば一讀して愉快の中に浩益を得べし

瘦々亭骨皮道人演説 ○和良井鋤太筆記

洋綴美本全壹冊 正價金五拾錢

○拍手滑稽獨演説 江潮諸君ヨ骨皮道人の滑稽獨演説ハ殊の外諸君の御意に協ひ大喝采を得まして出版元共隆社の申す及む此道人も誠喜ばしき事御坐り升ソコ又た續編の御註文が陸續参り升ので出版元の頻りに道人をオダテてサア道人モウ一席シヤベレ甘くシヤベレ澤山褒美を遣ると申し升處から道人もツト乘氣あかり今度の一層大勉強でお饒舌を致しますから何卒前編同様御愛覽を願ひ升處で他に道人の眞似をする奴があるかも知れませんが夫等の迎も道人の足元にも追付かぬ事諸君も御聽分け否お見分けがあり升子へ諸君(ヒヤヒヤ〜〜)

瘦々亭骨皮道人戲述 三

杵屋仙史閣○風月散史著

○十色婦人氣質

洋装繪入美本全一册(版權免許)
正價金五拾錢

天下の樂の婦人なり然れども世人の身を誤るも多くの婦人よ因る愛すべき婦人なり怖るべき婦人なり其婦人の穴を穿ちよ穿つて奥様。權妻。山神。地獄。女房。娘。藝妓。娼妓。後家。おさん。十八十色の手練手管魂丹内幕を筆頭の淨玻璃鏡よ寫せし古今無双の穴探し御婦人方よの御氣の毒さま殿方よの至極面白き無比の珍書なり
愛柳痴史校閱并序 浮世粹史著

○一讀明治浮世風呂 洋装繪入美本全壹册(版權免許)
百笑明 治 浮 世 風 呂 正價金五拾錢

一名命の洗濯

酸も辛も丸呑の。浮世粹史の戯れに。筆を執られし此書の。二馬翁の名を借れど。昔し。昔し。今。今。時代替れば人情も。打て替つた文明開化。其の開化をバ種として。滑稽洒落の新趣向。面白おかしき味ひ。是ぞ浮世の早取寫真。人の癖見て我癖なはず。ヒヨンな處の功能。嘘か真か論より証據。御覽の上で御評判を乞ふ

三木愛花仙史閣○田中清風著

○改海官員氣質

洋装繪入全一册(版權免許)
正價金五拾錢

此書の才子美人の離合集散を本として官員社會の内情を寫出すと上等官より等外に到るまで拂鬢折腰の工合休日の様樣昇街退省の様子地震の騒動等其身其中に在りて其事を見る如く其間に古名士今奇人の義聞勇談を挿入し悲壯涙を拂ひしむるあり凜冽髮冠を突かしむるあり況又美人の風情才子の艶聞を記したる十九世紀官海の寫真鏡とも云べき珍書あり

松の家みどり著

○新舊教育競

洋装繪入全壹册
正價金五拾錢

此書の窈窕たる淑女。活潑なる壯士。柔順の處女。篤實の少年を主人公とあしこれに對する父母の思想。師友の感覺。或の新趣を取り或の舊習を慕ひ其趣く所其觸る所悉く新舊思想の争闘あらざるを感ずべく敬すべく笑ふべく憐むべく其間奇趣妙想湧くが如し讀者之を繙るば其身其境に遊ぶの思ひあらん

松木嵐峰著

○政治小説 芳園之嫩芽

洋装繪入美本全壹冊
正價金五拾錢

此書の政治上の主義より一家の間小三黨を出し才子佳人各其主義より因て運動するの景況を寫し兼て愛蘭の形勢も移り其間慷慨悲壯義氣凜冽情緒纏綿風趣高尚敬すべく慕ふべく怒るへく哀むべく離合聚散幾多の星霜を経過し初めて其目的を達するに至るものなり此を一讀せば愉々快々の中も益する所多かるべし

佛國セルバント氏原著○愛花仙史閣○中村柳塢譯

○歐洲美人の民 洋装密書入全一冊 (版權免許)
正價金五拾錢

此原書の文章の流暢優美を以て歐洲名高其諸國に翻譯して傳へるもの數十版あり卷中一美人の困苦一姦婦の毒計一義僕の實意一武官の經歷を骨子として編成し變幻出沒巧みよ意想外の趣向を出せし譯文亦流暢優美を旨としたれば毫も原書の妙を損せざるなり一讀の上其妙を知り給へ

○佛國セルバント氏著○三木愛花仙史閣○齋藤良恭譯

○歐洲新話 谷間乃鶯 洋装密書入全一冊 (版權免許)
正價金五拾錢

此書は西班牙國の一族の子弟と一紳士の處女とが冥々の離たるを知らずして血縁を通じ恩讎纏綿一離一合斷腸すべく悲憤すべく哀痛とべきを骨子として編成し其間お羅馬の懷古又離黍の涙を酒ぎ月湖の奇偶に百年の縁を了し變幻出沒の新小説にして佛國巴里に於て紙價を貴からしめたる文章流暢趣向優美の原書を婉轉自在の筆を以て翻譯したる稗史なれば幸よ看官一讀して其奇書たるを知り給へ

松の家みどり著

○日米芳話 櫻と薔薇 洋装繪入全壹冊
正價金五拾錢

此書の米國の才子日本の佳人意氣投合結婚と約せるも一朝國を隔て屢々厄難に遭遇し商業の浮沈奇禍の幽獄親友の情誼佞人の戀慕義俠の幫助兄妹の奇遇益出でて益奇よ遂に忍耐節操を全ふし薔薇嬋娟櫻花爛熳時を得るものにして其間政治教育風流人情具に寫し一回編とけば他事を忘るゝに至る近來の一奇書あり

三木愛花仙史校閱并序 八重の屋主人著

○紅涙 薔薇の花影 洋装繪入美本全壹冊 正價 金 五 拾 錢

西洋小説の脚色妙なるも譯する者拙きを苦み日本小説巧みなるも脚色の劣るを惜み今茲は脚色を西洋の妙なるものみ擇び事實文章を日本の巧手よ成す故に編中の人才子義も富んで然も輕薄ならず佳人情濃かよして然も節操を重んず恩仇相纏ひ因果互に應ず幻中の眞、奇中の正、蓋し意想天外より落るの傑作なり

浦の家靈閣 竹軒居士編

○歌洲 珍事のはきよせ 洋装繪入美本全壹冊 正價 金 五 拾 錢

此書の世界は名を轟かしたる豪賊カルトーシが神出鬼没の伎倆を顯したる事實○可憐の女丈夫と呼ばれたるシャルロターが苦心の後志望を達したる状態○慷慨悲憤の活劇を演したるフェリックスの顛末○毒婦マリが情人を熱愛したるが爲め本夫を毒殺したる事情を艶麗の筆にて潤色し平易に綴りたる珍書あれば愛覽を賜へ

5000

公下武筆

...

八

六

荒甲夜

野

...